

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

# 大学間連携イベント 「平和構築とジェンダー」実施報告書

2014年11月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

## はじめに

グローバル協力センターでは、紛争終結国における平和構築と復興・開発に関する調査・研究・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」事業を2010年度（平成22年度）から実施しております。本報告書は、この事業の一環として2014年6月28日に特定非営利活動法人日本紛争予防センター（JCCP）のご協力を得て実施した大学間連携イベント「平和構築とジェンダー」の実施記録と参加者の報告書を取りまとめたものです。

当日は、お茶の水女子大学を始め8大学の学生が参加し、講義やアフリカの事例紹介を通じてジェンダーの基本概念と紛争下におけるジェンダーに基づく暴力の実態を理解し、グループに分かれてジェンダーを通してみる平和と紛争について議論いたしました。多くの参加者が初めて触れるテーマではありましたが、それぞれの専攻や関心に基づく異なる意見や分析を持ち寄ることで、紛争と平和を人びとの日々の暮らしから具体的に知るとともに、平和な社会を築くための国際協力について考えることができました。

練り上げられたプログラムで参加者の主体的な学びを促してくださった講師の皆様、積極的にグループワークを進めてくださった参加者の皆様にお礼申し上げますとともに、このイベントが更なる学びや実践へとつながることを期待いたします。

2014年11月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
センター長 北林 春美



## 目次

1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) スケジュール	
(6) 参加者	
2. 参加者報告書	5
3. 講師報告書	51
4. 資料	57



## 1. 活動の概要



## 1. 活動の概要

- (1) 活動の目的：ジェンダーの基本概念を正確に理解するとともに、アフリカの事例紹介を通じて紛争に関連するジェンダーに基づく暴力の実態について知識を深める。
- (2) 実施日時： 2014年6月28日（土）13：00～17：00
- (3) 実施場所： お茶の水女子大学 本館103号室
- (4) 講師： 特定非営利活動法人 日本紛争予防センター  
石井由希子氏（事務局長）  
笹生雪氏（プログラム・オフィサー）
- (5) スケジュール

スケジュール		
時間	内 容	実施単位
13:00～13:20	グローバル協力センター センター長挨拶 参加者自己紹介	全体
13:20～14:20	講義Ⅰ「アフリカの諺からみえてくるジェンダー」	全体
	講義Ⅱ「平和構築とは何か？」	全体
14:20～14:35	休憩	
14:35～15:50	グループワークⅠ「紛争とジェンダー」	小グループ
	グループワークⅡ「紛争下のジェンダーに基づく暴力」	小グループ
15:50～16:50	講義Ⅲ「紛争下のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援：ソマリアの事例」	全体
16:50～17:00	ワークショップまとめ	全体
	質疑応答	
	アンケート提出	

(6) 参加者

お茶の水女子大学 学部生 6名 大学院生 2名  
国際基督教大学 学部生 1名  
上智大学 学部生 3名



聖路加国際大学 学部生 2名 大学院生 2名  
創価大学 学部生 5名  
津田塾大学 学部生 1名  
奈良女子大学 学部生 1名 大学院生 2名 (うち交換留学生 1名)  
宮城学院女子大学 学部生 2名

お茶の水女子大学 (グローバル協力センター) 教員 2名

## 2. 参加者報告書



## グループ 1

池田桜（創価大学法学部 2 年）

岩城舞鈴（お茶の水女子大学文教育学部 2 年）

小穴紗穂（聖路加国際大学看護学部 2 年）

服部麗（宮城学院女子大学学芸学部 1 年）

吉田奈津美（上智大学国際教養学部 4 年）

李麗（奈良女子大学大学院人間文化研究科交換留学生）

### 池田 桜

#### 創価大学 法学部 2 年

##### 講義を通じて感じたこと

講義では、まず始めにアフリカと日本の諺からジェンダー問題を見ていった。私が印象に残っているのは一つ目の諺である。ガーナの諺で「**A woman is a flower in the garden; her husband is the fence around it**」と言うものである。講義の参加者の中では、この諺は、女性は弱くて男性が守るものである、と言うような意味であるとする解釈が多かった。私もこの解釈には納得している。しかし、最初にこの諺を見たとき、女性を神聖なものとして扱っている諺のように感じた。女性は大切に神聖なものであると言うことを、庭の中の花として表したと感じた。そのため、また違った視点で物事を見ることの面白さを感じた。

さらに、この講義の中では、日本、ケニア、ルワンダの女性国会議員の比率が紹介されていた。日本が先進国の中でも群を抜いて低いことは知っていたが、発展途上国であるケニアや、同じく発展途上国でありほんの 20 年前に悲惨な内戦があったルワンダよりもはるかに低いという事実には驚いた。しかしその一方で、ケニアの一夫多妻制法案の制定など女性の権利を否定する働きが世界中で起こっていることの矛盾に関して深く知ることができた。

第二部の講義では、紛争下のジェンダーに基づく暴力について学んだ。これは私が最も興味のある内容であるため、非常に興味深かった。まずジェンダーに基づく暴力の類型には何があるのかを学んだ。性暴力や身体的暴力などはよく聞くため違和感はなかったが、その中で経済的暴力と言うものがあった。これは稼いだお金を女性に渡さず、そのことによって生活できない状態にすると言うものである。普段はこの経済的暴力という言葉は聞き慣れないが、それもジェンダーに基づく暴力であるのかと驚いた。

また、この第二部の講義の中で印象的だったのが武器としての性暴力である。私はこの講義を受けるまで、紛争下に性暴力が多発するのは、日常的に人を殺していることで理性の歯止めが効かなくなり、自分の欲求を満たすためだけに多くの兵士が性暴力を行うのだ

と考えていた。しかし現実はそのようではなく、女性に身体的・精神的な傷を負わせるだけでなく、男性の自尊心をも傷つけコミュニティ全体を崩壊させる一つ的手段として性暴力が使われているという現状を知った。これは自分にとって大きな衝撃であり、改めて女性の人権をしっかりと考えていく機会となった。

さらにこの講義では、実際に JCCP が行っている支援を例に、ジェンダーに基づく暴力の被害者へはどのような支援方法があるのかも紹介されていた。一般のホームページではくわしく知ることができないような支援方法を聞くことができとても貴重な機会となった。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

最初のグループワークでは性暴力の被害にあった一人の女の子の事例をとって、その子の周りの環境は紛争前、紛争中、紛争後にどう変わったかを見ていった。普段資料など読んでいるときには何気なく見逃してしまうようなことを登場人物一人一人に注目して時系列ごとに見ていったことで、時間に伴う変化や、男女の差などが明らかになり、改めて男女の格差は戦争中、紛争中は特に大きくなるということを知ることができた。

さらに二つ目のグループワークでは視点を変えて男性に対する性暴力について考えていった。今まで、紛争下での男性への性暴力の存在は聞いたことはあったが、しっかりと学ぶ機会はほとんどなかった。そのため、なぜ男性への性暴力も大きな問題なのかということグループのメンバーと話してさらに深めることができた。

**岩城 舞鈴**

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

この講義では、ジェンダーや紛争、平和構築といった、よく聞くけれどはっきり意味が分からなかった言葉の定義をきちんと教えてくださるところから始まったのでとても分かりやすかったです。紛争と聞くと武力や軍が動員される大きな争い事であるというイメージがありましたが、実は身近な対立も紛争であることや、紛争への取り組みとして紛争予防、紛争管理、紛争解決、そして平和構築の 4 つの段階があることを聞き、今まであやふやだった紛争や平和構築へのイメージが整理されました。

そして今回の講義では GBV が内容の中心となっていました。これは紛争下の貧しい国だけでなく日本にも関連することなのでとても興味深かったです。文化的な性別役割意識の強い日本では経済的暴力や社会的暴力は決して少なくないでしょうし、日本では武力として性的暴力が用いられるというケースはないかもしれませんが、いじめの方法の一つとして性的暴力が用いられることがあると以前聞いたので、悲しいことに相手の尊厳を傷つけるという目的での性的暴力は日本でも存在するようです。このように比較的平和で物が

豊かな日本でも起こる暴力が、紛争下という危険で不安定な状況で弱者にふるわれた時の影響を想像すると恐ろしいと感じました。

また、講義で特に印象に残ったのは、紛争の被害者が小さな紛争の加害者になりうるという言葉です。その発想を持ったことがなかったので驚きました。逆に言えば、紛争の被害者がまた新たな紛争の被害者を作ってしまうということになります。だからこそ紛争被害者ひとりひとりへの心理的なサポートが紛争予防や解決に繋がるということを学びました。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

私はお茶の水女子大学のグローバル文化学環に所属しているのですが、そこで平和構築やジェンダーという課題に興味がある人は大体国際協力や国際援助という視点から問題を見ている文系の学生がほとんどです。しかし今回のイベントでは、グループ内に看護を勉強されている方や国際政治を専攻されている方など、普段自分とは全然違うことを勉強し、違う視点を持っている人とグループワークができたのでとても新鮮で楽しかったです。これは大学間連携イベントならではの利点だと感じました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

私はどちらかというとジェンダーに興味があって今回のイベントに参加したのですが、平和構築についてももっと知りたいと思いました。大学の授業でも平和構築というテーマを扱う授業があったと思うのでそれを履修してもっと学んでいきたいです。興味を広げるきっかけとなったこのイベントには感謝しております。ありがとうございました。

小穴 紗穂

聖路加国際大学 看護学部 2年

### I. 序論

「平和構築とジェンダー」のイベントに参加し、平和構築とジェンダーについて色々な視点から学ぶことができた。例えば、アフリカの諺を通して歴史の視点からジェンダーを考え、紛争中の体験談を通して紛争時に生じるジェンダー問題について考えることができた。また、JCCPのプロジェクトを通してどのように平和構築支援を実践しているのかについて学ぶこともできた。この報告書では、まず講義を通して学んだことや印象に残ったことを述べ、次にグループワークを通して学んだことや印象に残ったことを述べる。そして、「平和構築とジェンダー」を通して学習したことを今後の学びにどのように活かしていくかを考察する。

## II. 本論

まず、講義の中で印象的だったことを挙げながら、講義を通して学んだことを述べる。講義で印象に残っているのは、JCCPの平和構築に関するプロジェクトの動画である。動画の中では、紛争下で被害を受け、その精神的ストレスから暴行を起こす加害者になってしまった男性に心のケアを行い、男性の抱える苦しみを和らげ、平和構築を担う人材へと育成していくというプロジェクトが取り上げられていた。この動画を見る前に、講義の中で平和構築とは「紛争後の社会に平和を構築することである」と学習し理解したが、実際にどのように行われているのか、紛争後の混乱した社会にどのようにアプローチしているのか、そもそもアプローチすることは可能なのかと疑問が生じた。また、紛争後の混乱した状況下で行うことのできる支援として、物資支援しか私の頭に浮かばなかった。しかし、JCCPのプロジェクトでは、人々の心に働きかけ、平和構築を外部の人が行うのではなく現地の人々が行うように実施していた。私は、そのことに驚き感銘を受けたので印象に残った。そして、以前、所属していた国際協力を行う学生団体が、「現地の自立」に重視して取り組みを行っていたことを思い出した。平和構築も現地の人々が動き出すこと、つまり平和構築の担い手となることが重要であるということはこの動画を通して学ぶことができた。また、「戦争、紛争の被害者を平和構築の担い手として」という言葉が動画の最後に流れ、この言葉も大変心に残った。平和構築のためには、人を育てることやしくみを作ることが重要であり、そのために紛争地で求められることは、悲しみや悔しさ、後悔など傷を負った心を癒し、未来へ気持ちを向けることや同じ過ちを繰り返さないように支えることであると私は考えた。

次にグループワークを通して学んだことや印象に残ったことを述べる。グループワークで印象に残っていることは、男性のレイプ被害者についてグループのメンバーでまとめたことである。この講義を受けるまで、レイプの男性被害者がいるということを知らなかった。この講義を受けると、被害者の事例を読み大変衝撃を受けた。グループのメンバーでまとめたところ、周囲から同性愛者だと誤解される恐れがあること（アフリカでは同性愛者は認められていない）、男性被害者の認識がなく理解を得にくいこと、男性専門の医療施設やカウンセリングがないこと、カミングアウトしにくいことなどの男性特有の苦しみや困難さが抽出された。このように、グループのメンバーで事例をまとめることによって、男性被害者特有の辛さや問題があることを学習することができ、単に事例を読む場合に比べて、より理解を深めることができた。また、講義が始まったときは、初めて会う人同士のグループワークに緊張したが、大学も専攻している学問も異なるメンバーだったからこそ様々な意見を聞くことができたのではないだろうか。また、講義の最初に行われた他己紹介のおかげで、話すきっかけが生まれ、参加者について知ることができた。このように工夫次第で、緊張や不安を和らげることができるということも、グループワークを通して学んだことの一つである。

### Ⅲ. 結論

「平和構築とジェンダー」の講義やグループワークを通し、なんとなく理解していた平和構築やジェンダーについて、改めて学ぶことができ深く理解することができた。私は、一度大学を卒業してから、今の大学に編入し、現在は看護学を中心に学習している。そして、看護学を学びながら、看護は前の大学に所属していた時に行っていた海外ボランティア活動や国際協力活動に通ずるところがあると度々感じていた。例えば、相手（看護の場合は患者、国際協力の場合は現地の人を指す。以下同様）のニーズを汲み取ることが重要であることや相手の自立を重視すること、プランを立てる時に現在だけでなく未来を考慮することなどである。今回の講義の中でも看護と似ている所を感じる場所があった。それは、講義の中で印象に残ったと挙げた、平和構築のために心のケアを行うことである。目の前のことだけでなく、相手の未来を見据えて、自ら平和構築を行えるよう支援しているところが似ていると考えた。今後も、看護と以前の学びや今回のイベントのような看護とは異なる視点の学びを結びつけて深く学習していきたいと私は考えた。

また、大学の講義の中で、知識や技術によって、行う看護ケアが変わってくるという話を聞いた。卒業して看護師になった時に、できるだけ広い視点で考えられるように、患者さん一人一人に合った個別性のある看護ができるように、患者さんとその家族にとって一番いい状態を導き出し実行できるように、様々なイベントに参加し、看護以外の知識も養い、それらの知識を積み重ねていきたいと私は考える。

## 服部 麗

宮城学院女子大学 学芸学部心理行動科学科 1年

### 講義を通じて感じたこと

今回のテーマは「平和構築とジェンダー」であった。講義ではそれぞれの説明、JCCPが行ってきた活動の紹介もあった。ジェンダーにおいてだがジェンダーをことわざから見るとみるという発想に興味をわいた。アフリカのことわざを1つあげる。「A woman is a flower in a garden, her husband is around it.-From Ghana」このことわざから女性は弱く、男性は強くということが読み取れる。そこで日本のことわざをあげてみた。「男は度胸、女は愛嬌」なんと遠く離れたアフリカでも日本と同じく性別で役割が決められているように感じる。現代の川柳からは大変興味深い奥様からの投稿であった。（旦那に対して）「帰宅してうがい・手洗い・皿洗い」である。旦那さんが仕事帰りに家事までさせられているように感じとることができる。ここまでをまとめると日本のジェンダーも他人事ではない。奥さんが家庭の主導権を握る家庭が増えている。女性の社会進出が理由の一つではないかと。ここで私がわかったことはジェンダーというのは時代で変化することである。事例でワンガリー・マータイさんがあげられていた。実は小学生の時に地元のイベント会場（パルセ



飯坂)にお越しいただいたことがある。そのため「MOTTAINAI」という言葉を聞いたとき大変懐かしく感じた。しかし2011年に亡くられていたことを初めて知り驚愕した。ケニアでは2014年4月29日に一夫多妻制法が成立し妻に拒否権がないということを知り男尊女卑が根付いているように感じた。

平和という言葉から日本であれば白い旗は敗戦を思い浮かべ、ヨーロッパではオリーブが有名なため枝をくわえた鳩を思い浮かべる。このように見る人の国や文化によって違いが生じることを学んだ。平和構築についてだが参加する前までは幅広い意味を持つのだろうと思い定言できるものが浮かばなかったが JCCP では失ってしまった状態から立て直し再発防止をして特に紛争後の被害を受けた人々の心のケアや社会の平和を作り直していくことを行っていることを知った。1人の女性の具体的な話を聞くことが出来た。紛争と干ばつを逃れるため国内避難民キャンプにたどり着いた。この時私は避難民キャンプと日本の自然災害時に開設される避難所との違いに気付くことが出来た。それは日本の場合、自宅にいと自分の身が危険だからであり、安全でみんなが集まることができるところに避難所があり誰もが帰れるものだと思って避難してくると私は考える。しかしソマリアなどは異なる意見をそれぞれが持ち、対立している紛争によって避難民キャンプに来る人々が多い。人間が起こした紛争が終わるころには自分の家はすぐには住めないほどの状況になっているかもしれない。もう戻ってくることはできないかもしれないと思いながら避難民キャンプに向かうのではないかと考えたら、平和な日本にいる私たちには考えられないほどの覚悟を決めて生きていることに胸が締め付けられた。その後、彼女は強盗に襲われ、家族は死んでしまい性的暴力も受けたがなんとか生き残った。そして警察官の旦那さんを見つけやっと幸せをつかめたと思ったはずが旦那さんは生活費まで薬に使ってしまう人だった。彼女は旦那さんから性的暴力、身体的暴力、経済的暴力、精神的暴力、社会的暴力とたくさんの暴力を受けたのである。この事実を聞いた後に私たちは彼女に必要なことはなにかを考えた。病院に行くことや職場をみつけることなどがあがった。実際に JCCP が行ったことは無料の病院を作り現地のカウンセラーを常置して旦那さんと対談をした後に夫婦が話せるようにした。現地の NGO と連携・協力し助言をしてもらう。被害者には「1人ではない。」と伝えていた。JCCP が引っ張っていつているように見えていたがそんなことはなくいつかは支援から離れて自立できる地域をめざしなるべく現地の方ができることを重視していて支えていることが学べた。

### グループワークを通じて感じたこと

二つの内容をやったが、どちらも個人で1枚の文章を読んでから各班が模造紙に自由にまとめた。初対面の方々と積極的に進めていくタイプと見守るタイプに分かれしまいがちになるが、私たちの班はプログラムが始まる前に自己紹介もやってしまうくらいみんなが積極的であったため、グループワークもスムーズにまとめることが出来た。仕上がった後は各班の内容を見ることが出来たが同じ内容の質問でもまとめ方に違いがあり面白かつ

た。時間の都合もあるがみんなの前で各班発表ができたなら良かったと思った。このグループワークを通して戦争後は戦争前に比べ男女の生活に変化が起きること、同性愛は良いことだとはとらえていられなくてむしろマイナスなイメージを持っていること、男性レイプの被害が知られていないのは男性自身のプライドと自尊心を喪失させてしまいカウンセリングなど悩み相談をしないことが理由であるということを知った。

吉田 奈津美

上智大学 国際教養学部 4年

### 【講義を通じて】

今回の講義を受けて、様々なことを学びました。その中でも一番印象に残ったのは、アフリカのケニアやルワンダなどの国に比べて日本は女性国会議員の比率がとても低いということでした。日本では、多くの途上国に比べて女性が自由に発言できるツールや機会がたくさんあると思うので、それらをもっと活用し、私たちが世界の女性を代表してもっと男女平等を訴えていかなければいけないと感じました。日本国内に住んでいて感じるのは、性別に関わらずジェンダーの問題に関心がある人が少ないということです。それを改善するために、SNS などを通じた啓発活動などにもっと積極的に取り組みたいと思いました。

### 【グループワークを通じて】

ウガンダの紛争によって被害を受けたジェシカの話に関するグループワークを通して、紛争は幸せな家族の生活を一瞬にして壊してしまうものだということが改めてわかりました。また、紛争はそれが起こっている期間だけでなく、終わったあとも人びとに影響を与えつづけるということがわかりました。グループワークで印象的だったのは、紛争による影響を登場人物ごとにおいて模造紙にまとめた時に、紛争中、紛争後の両方で女の子であるジェシカが最も大きな影響を受けていたことです。両親を失くしたり、家を失ったりしたことによる精神的な痛みは誰でも同じだとは思いますが、女性はその他にも身体的被害を受けたり、学校に行けなかったりなどより多くの影響を受けるということを知りました。

また、ジェンダーの問題を解決することはとても重要ですが、こうした問題は紛争がなければ起こらないことだと思うので、まずは世界からこのような紛争を失くすことが一番大切だと感じました。

近年、日本では男女平等に対しての注目が高まっており、国会議員や、企業の管理職における女性の数を増やすなどの政策がとられています。しかし男女平等とは、男性と女性が全く同じ行動をとれるようにすることではなく、なにか行動をしたいと思ったとき、それを実現するための機会の平等だと思います。女性には「専業主婦として家にいたい」、「管理職につきたいとは思わないが、子育てと仕事は両立したい」など、一人一人望むものが

違うと思うので、そうした個人のニーズに注目し、それらを実現できる環境を整えることが大切だと思いました。そのため、女性国会議員の数の増加はそうした問題を解決した‘結果’、達成されるべきものであり、それ自体が目標ではないのだということを感じました。

## 李 麗

### 奈良女子大学大学院 人間文化研究科 交換留学生

この講座に参加する前に、いったい「ジェンダー」とはなにか、自分の頭の中で「男性」と「女性」という単語が出てきた。参加した後、日本の大百科全書により下の説明を通じて、大体分かった。

「ジェンダー」は「社会的、文化的な性差」と一般に訳される。先天的なものではなく、文化的に身につけた、あるいはつくられた性差の概念をさす。ジェンダーの研究は、文化人類学では、いかに男性と女性が日常生活においてそれぞれの役割を果たし、それぞれの社会的役割がどう認識され評価されていくか、またそこに生じる差異がなぜ構築されていくかを追求する。家族での責任、仕事上での役割、その他日ごろの生活のなかで、「男性／女性」はそれぞれの役割分担をもつ一方で、相互に関連しあっている。いかなる文化においても、そこに、人々は文化的意味を構築している。したがって、異なる染色体によってつくられる形態上の性差とジェンダーとは違う。また、ジェンダーの研究では「女性の人類学」だけでなく、男性もその研究対象であり、さらに男性と女性とのお互いに補いあい、競いあい、あるいは敵対しあう、そうした諸関係も重視される。

「ジェンダー」とはもともと言語上の性別を指し示す言葉であったが、今は「社会的、文化的性差」と認識されることが多い。そしてわれわれが常に思った通り「男らしさ」や「女らしさ」などの物理的認識は変えないが、社会や文化の分野において認識される「ジェンダー」には可変性があるだろう。

諺「*a woman is a flower in a garden, her husband is the fence around it*」や「男は度胸、女は愛嬌」などからみれば、人に与えられる男性と女性のイメージが違うところが分かる。そして女性と比べて、男性のほうが強くて、一般的に男性は上位にいて、女性は下位にいる。さらにある国における男性の社会的地位も高い。例えば、アフリカのケニアにおいて 2014 年 4 月 29 日一夫多妻制法が成立し、妻に拒否権なし。これは伝統的なアフリカのジェンダー、すなわち「男尊女卑」だろう。一方「ジェンダー」という言葉は性平等の意味を含めて、男性と女性との階層性を批判することも含むだろう。

ソマリアにおける白い旗は「平和」のシンボルであり、ヨーロッパにおける白い鳩とオリーブの葉っぱは「平和」のシンボルである。平和構築とは何か。いったいどのような活動であろうか。紛争において、武力衝突後に行われる社会を再建し復興する活動は平和構築であろう。しかし、平和とは単に戦争がないという理解で不十分であろう。なぜなら戦

争以外に貧困や人権侵害や政治抑圧などは常に存在するからである。だから紛争解決するために、公正な選挙や社会、経済の再建や民主化支援や開発促進など多様な分野にまたがる。平和構築とは暴力構造を除去し、紛争を予防し、管理し、解決し、再発予防することである。

武力紛争を解決する努力方向の中に女性の声に注目することは今でも古いことではない。ルウェロ村の少女ジェシカの物語からみれば、武力紛争のせいで少女は幸せな生活を失い、教育も受けられないし、兵士たちにレイプされた。一方、少女の兄さんたちは教育を受け続けて、レイプされていない。紛争の中で、一般的に女性は攻撃される犠牲者であって、攻撃から守るべき被害者である。すなわち、紛争の中で女性のイメージは常に能動ではなく、主体ではないのである。

紛争の中で女性に向けられる暴力には性暴力や身体暴力や経済暴力や精神暴力や社会暴力などは急増することが多い。これらの暴力行為は武装集団や個人などによって行われて、紛争中や紛争後に女性に対する暴力は行われ続ける。しかし、武力紛争における女性に与えられるトラウマに対して、我々は映画や書物や写真などを通じて、被害者の辛さが分かる。しかしこれはせいぜい視聴覚のレベルであろう。なぜなら事件当時の怖さや痺れるような無意識などは体験できないであろう。

女性は常に非戦闘員として、家族や社会や文化などを象徴する。もし紛争が長期化すると女性は経済のトラブルに落ち入り、社会の守りを失って、生きるために売春をして、戦争に参加するなどの可能性もある。従って、武力紛争下における女性を保護することが必要である。即ち、平和構築はとても重要である。その中で民主支援や和解の促進などを通じて平和を作り直せるであろう。そして紛争予防、紛争管理、紛争解決、紛争再発予防も必要である。

女性は常に被害者と位置付けられ、女性の脆弱性や受身の立場などを強調し過ぎる。その一方、男性の方は攻撃性や支配性を位置付けられる。従って、ジェンダーに基づく暴力に対して、常に女性のほうが注目されるが、男性のことはあまり重視されない。

コンゴ民主共和国の男性被害者の事例から見れば、プライドと自尊心を喪失し、深いトラウマに苛まれている男性も存在する。一般的にレイプというと被害者は女性だけと思われている。しかし、内戦や部族間戦闘が続くアフリカ大陸各地で数千人規模に及ぶと考えられている男性のレイプ被害者がいる。

男性をレイプするという手法は多くの紛争地区において幅広く行われている。しかし、女性のレイプに対する注目が注がれている影で男性へのレイプ問題は殆ど報道されていないのが現況である。自分でもこの講座に参加する前にこの暴力における被害者の中に男性もいることを考えていなかった。

そして男性犠牲者は常に同性愛者というレッテルを貼られる。他には、ソマリアのようなイスラム教国におけるレイプ被害者は、社会から犯罪者としてもレッテルを貼られている。さらにアフリカ社会では同性愛の問題はタブーと見なすから、被害者の困難はもっと

深刻になった。こうした男性のレイプ被害者の回復プロセスにおける恐ろしい問題は女性と比べてもっと難しいかもしれない。

男性は人にあげられているイメージは強いし、攻撃だから被害者と思われたい。特に、武力紛争の中における男性的なジェンダーが極めて強調される傾向もある。その一方女性は常に守られる存在である。そして女性は脆弱で無力な存在として、自分で自分を守ることができないというイメージを人の頭に植え付けられる。従って、男性被害者の注目が疎かにされる。

平和構築のアプローチは女性に対する注目するだけでなく、男性の方も注目する必要があるだろう。

## グループ 2

石洋柳（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 M1）

古賀優奈（創価大学法学部 1 年）

高嶋早紀（お茶の水女子大学文教育学部 1 年）

丹羽春香（上智大学外国語学部 3 年）

山田祐理子（奈良女子大学理学部 2 年）

### 石 洋柳

#### お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 M1

今日の「平和構築とジェンダー」という講義で、スタッフが述べた現地の物語や経験からいろいろ勉強し、強いインパクトを受けました。そして、各地からの参加者たちの分野も違うので、問題を視る角度も斬新に感じ、特にグループワークの時、活発な意見交換をしたことで、私の意識を一新して、嬉しかったです。

私は去年 10 月に日本に来て研究生として、お茶大の開発・ジェンダー論コースで勉強しています。その時の研究テーマは「人間の安全保障」、その後、アフリカや「日中の平和プロセスにおける国際協力に関する研究」に変えました。いろいろな本を読んで、平和のために、戦争と紛争の原因を一生懸命探していました。原因を探し、焦点を絞り、対策を提示すれば、問題は自然に解決すると思い込んでいました。経験でなく、理論面だけで考えることは机上の空論となり、誰も助けません。

今日の講義で、まず、野生動物、気候、芸能人などからアフリカのイメージを話して、そして、アフリカと日本の諺からみえてくるジェンダーを紹介しました。後は、女性の政治参加、社会進出、家族観のゆらぎ、同性愛を巡ってなど、最新のアフリカの政策を知り

ました。驚いたのは、自由、平等、人権が提唱される今、今年 4 月 29 日、ケニアで一夫多妻制が成立したことです。もう一つは、大虐殺を経験したルワンダの女性の政治参加率で、日本の 8 倍（衆議院）、2.5 倍（参議院）です。

伝統的な男尊女卑から政治、社会、経済面で変化しつつありながら、伝統的なジェンダーへの回帰、揺らぎもあります。

平和構築の幅広さも私の考え以上でした。暴力の種類（性的、身体的、経済的、精神的、社会的）も紹介されました。これらのモデルは具体的なケースの理論的な分析には役に立つと思います。

グループワークで、2つの物語を分析し論議しました。うちのグループだけではなく、すべてのグループのみんなの感想を読んだあと、自分の考えが広がりました。ケース 1 では、主人公ジェシカだけではなく、すべての登場人物に紛争の不同時期の困難を書き出しました。後は JCCP は、どうやってジェシカを助けたかを詳しく説明しました。ケース 2 は、今のジェンダーの問題だと思います。今のジェンダー問題の中心は女性で、男性は周辺化されました。紛争の中で、男性も暴力にさらされることも少なくないと初めて聞き驚きました。いろいろな理由で男性は沈黙し、我慢して、精神的なトラウマがつりました。男性の立場を考えると、女性の悲しさに負けない気がします。

いろいろな物語を聞いて、JCCP の支援方法を聞き、ソマリア、ケニア、スーダンの難民に心のケア、人を育て、カウンセリングを提供することなどを通じて、一人一人に着目し、理論でなく、行動して、なるべくたくさん人を助けようという気持ちに感動しました。

今後、私は理論面だけの勉強でなく、休みを利用して NGO に参加することを通じて、人を助け、未来の夢でなく、早く実現するよう行動して、この行動を通じて、理論面の理解と補充もしたいと思います。

**古賀 優奈**

**創価大学 法学部 1 年**

「平和構築とジェンダー」の講義を通じて、強く印象に残ったことが 2 点ある。まず 1 点目は、アフリカの法規則に関してであり、ケニアで 2014 年 4 月 29 日に一夫多妻制法が成立して、妻に拒否権がないことである。このような法律を成立させることにより、ケニアの人口増加による問題が拡大してしまうと感じた。また、妻に拒否権がない事は女性の社会進出を妨げる原因である男尊女卑が現在でも深く根付いている証拠でもある。

2 点目として、性暴力の被害者は男性であるということである。講義で配布されたプリントの話を読んで衝撃を受けた。性暴力により敵の戦う士気を下げたり、コミュニケーションを崩壊させるという意図があるという事を知り、戦争というものは、人を傷つけるだけでなく、人が生きていく本来のあり方をなくしてしまう行為であり、それが今も続いている

と思うと恐ろしさと自分の無力さを実感した。また、これらの講義を聴き、少女の話をグループで時代や登場人物にまとめる事で、戦前・戦中・戦後で人物一人ひとりのその時々  
の状況について思いめぐらせる事が出来た。

この講義を通じて、私はアフリカで起きている事を知って無力だとは思ったが、無力を  
実力に変えるための原動力になった。世界の現状を知り、自分に何ができるのかを考え、  
それを実践していける過程の重要性をこの講義で知った。とても意義のある講義に参加で  
きたと思う。昔の日本もそうであったが、教育体制の変化により女性にも教育が十分施さ  
れ、女性の進出がなされた事を考えると、教育は、人は人として生きるために必要なもの  
だと改めて感じた。

講義のメモを見返して、これはどういう意味なのかと疑問に思った点がいくつかあり、  
その場で疑問に思い、質問できなかつたということが反省点として挙げられた。しかし、  
それらを自分で調べてみると、より頭に入った。このことにより、自ら進んで調べる機会  
をもらったと思う。

高嶋 早紀

お茶の水女子大学 文教育学部 1年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

最も印象的だったことは、ジェンダーに基づく男性への暴力だ。「ジェンダー」と聞けば  
女性が被害者であると考えがちだったが、この講義に参加してその考えを改める必要があ  
ると感じた。また、身近な口論の例から「紛争は無くならない」という事実を理解するこ  
とができた。だからこそ、その後の対応・紛争予防に繋がる人材育成、心のケア、安全な  
社会の仕組みづくりや人々の能力強化を進める平和構築が重要なのだと実感した。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

紛争時にレイプされた二人の男女の例が非常に生々  
しく、衝撃的だった。特に男性の場合は、世間の男性  
同士の強姦への無知・伝統的タブー・身体への後遺症  
から女性がレイプされたケースとの相違点が多々あり、  
彼らへのカウンセリングはとても難しいものであると  
も感じた。グループワークでは四人で様々な意見を出  
し合い、用紙に記入して可視化することでより一層暴  
力の事例について理解が深まった。特に、ウガンダの  
「ルウェロ村の少女ジェシカ物語」では、資料に書



グループワークの様子

かれていること以外にも登場人物たちの紛争前後における状況や心情を推測したことにより、ジェシカに対して行える支援を具体的に考えることが出来た。なるべく、被害者の立場になって解決策を考えることが重要なのだと改めて感じた。

### 平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

今回はアフリカが舞台だったが、諺の例にもあったようにジェンダーに関しては日本との共通点も多くあった。男尊女卑の傾向に加え、日本では男性へのセクハラも最近話題にされることが増えた。女性に対する社会的・経済的暴力は日本がまだましであろうが、女性の政治参加については明らかにアフリカの国々に劣っている。女性議員数を法律で決めてしまうのもどうかとは思いますが、私たちが彼らにジェンダー平等を説く一方で彼らからそれを学ぶことが多いのも事実であると思う。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今までジェンダーについていろいろと学んできたが、「紛争下のジェンダー」というのは私にとって新しい視点だった。今回の講義で紹介されたのはほんの一部だと思うので、より詳しく調べてみたいと思う。

丹羽 春香

上智大学 外国語学部英語学科 3年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

「アフリカの諺から見えてくるジェンダー」の講義で、諺がどのような伝統的なジェンダー感を物語るかについてのお話があり、私は今まで諺とジェンダーを繋げて考える事がなかったので、興味深かった。ガーナやソマリアの諺の例から、男尊女卑のジェンダー感が垣間見えたが、近年では女性が政治、社会、経済面で活躍をしていることにより、必ずしも女性が弱い立場におかれているわけではなく、時代によってジェンダーが変化しつつあると言うことを学べたのが印象的であった。

また「平和構築とは何か」の講義では、平和構築という言葉の意味や、なぜ平和を築かなければならないかという事について考えさせられた。一言で平和構築と言っても、紛争予防や、紛争管理、紛争解決の上に、次の紛争を防いで平和を築いていくと言う意味の平和構築が存在するのだという事を知ることができて、大変勉強になった。見せていただいたビデオの中の、「紛争の被害者を平和構築の担い手に」という言葉が最も印象に残ったのだが、紛争を自分たちで解決できるように「人を育て」、その「仕組みを作る」事の必要性について気づかされた講義であったと感じる。



## 今後の学習や研究に向けた抱負

私は 9 月からイギリスに留学し、向こうで開発学を学ぶ予定だ。開発学と、紛争や平和は切り離せない分野だと思うので、今回の「平和構築とジェンダー」という観点を踏まえたうえで、途上国の開発について学び、考えてみたいと思う。

山田 祐理子

奈良女子大学 理学部情報科学科 2 年

## 講義を通じて感じたこと・考えたこと

私が講義を通して印象に残っていることは、大きく 3 つある。

1 つ目は、戦略として性暴力が武器の役割を果たしている、コミュニティ全体を破壊させるということだ。女性が性暴力を受けることで、その女性は精神的トラウマを抱える事になる上に、社会的に孤立したり疎外されたりするようになる。その女性の夫は、自分が妻を守れなかったと自分を責め、自尊心が傷つき士気が低下する。また、その家族は、性暴力を受けたひとのいる家族だとみなされ、地域の人々から冷たい目でみられる。このように、敵対集団の女性を陵辱することで、敵対集団のコミュニティ全体を崩壊させるというものだ。戦略として成り立っていることに衝撃を受け、また、人間の精神面にも攻撃をしていくことへの恐ろしさを感じた。紛争と聞くと、迷彩柄の服を来て、銃を持った兵士が村に押し入って人々を攻撃する、といったイメージしか持っていなかった。しかし、性暴力を含めた紛争が長期化し、崩壊したコミュニティの中で、被害者や加害者が社会復帰することが難しいという現状があることを知ることができた。

2 つ目は、ジェンダーに基づく暴力には、経済的暴力があるということだ。ジェンダーに基づく暴力を分類すると、性的暴力、身体的暴力、経済的暴力、精神的暴力、社会的暴力に分けられるという。お金を家族に渡さない、という状況は紛争下においてのみならず、我々の身近に存在する状況であると思う。ただ、これが暴力の一種であると気づいていない人は多いのではないだろうか。暴力というと身体的暴力のイメージが強いのだが、それだけではないという認識を社会全体に広め、もしジェンダーに基づく暴力の被害に遭ったときに相談できる場所があるということを知っておくべきだと感じた。

3 つ目は、何かあったときに頼れる人がいるということの大切さである。JCCP、現地で活躍する NGO、政府関係者、避難キャンプ内の相談窓口などが協力し、コミュニティレベルの増大を図ることで、被害者を守っていく。「あなたは 1 人ではない」といったメッセージをいれた文具や T シャツを配布したり、ラジオ特番トークショーで訴えかけたりすることでコミュニティの啓発になるそう。紛争下のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援例として、講義中に「ソマリアでのファティマの物語」を聞いた。ファティマは、先に記した 5 つの暴力を受けていたが、国内避難民キャンプ内の相談窓口を通して夫との対話

を始め、少しずつ回復していったという。やはり最後は人と人の対話によって物事が解決するのだと感じ、その対話が出来た状態までもっていくのが周りの支援者の役割なのだとわかった。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

#### 1. ジェシカの物語を読んで

登場人物それぞれの状態を時系列で表すことで、紛争前、紛争中、紛争後の体験が男女によって異なるということを理解できた。紛争はそれぞれの将来にも影響を及ぼし、その人の人生を狂わせてしまうものだと感じた。

#### 2. 男性の性暴力被害者の事例を読んで

まず、男性被害者が存在するということがあまり考えたことがなかったので、読んだいくつもの事例は私にとって衝撃的だった。社会的な認知度が低いがために、被害を受けたことを告白できず、医療事業者にも助けを求められない。女性被害者に対する支援はあるが、男性被害者に対する支援はあるのだろうか。男性被害者もいるという事実を社会に広め、被害防止と被害を受けた場合のケアができる体制が必要だと感じた。

今回、講義を受けるまでは紛争やジェンダーに基づく暴力に関して無知に近かったが、講義や演習を通して、それらに関する現実の一部分を知ることができた。また、平和構築というのは、紛争後の社会において人々を支えていくことであったり、紛争を未然に防ぐための仕組みを作ったり、人材を育成したりすることでもあるという考えを自分の中に取り入れられたこともよかった。世界で起きていることを知っておかなければ、支援に関する広告を見かけても目に止まらないだろうから、知らなかったことをたくさん学べて有意義な時間を過ごせたと思う。「平和構築とジェンダー」を考える機会を設けて下さりありがとうございました。

### グループ 3

桑原和美（創価大学法学部 1 年）

齋藤美咲（お茶の水女子大学文教育学部 3 年）

鄭旦丹（奈良女子大学大学院人間文化研究科 M2）

橋元絢香（宮城学院女子大学学芸学部 3 年）

林理恵（聖路加国際大学看護学部 2 年）

桑原 和美

創価大学 法学部法律学科国際平和・外交コース 1年

#### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私が今回の講義を受けて、もっとも印象に残ったのは、レイプが女性だけでなく男性にもあるということである。メディアでも女性について問題が取り上げられる影響からか、それに対して問題意識を持つ人は、日本にも多くいる。しかし男性にもその経験に悩む人がいるということは、そのことについてなにも知らなかった私にとって衝撃だった。その多くの男性がその経験を誰かに相談したり、ケアを受けたりすることができないでいるということの問題の大きさを強く感じた。紛争があることによって起こる悲劇は、私たちの想像を超えているということに気付かされるものであった。

#### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

一つ目のグループワークでは、紛争前と紛争中、そして紛争後のそれぞれをまとめたことで、いかに紛争が私たちの生活に影響を及ぼし、平凡な幸せを壊すものかということがわかった。特に、ウガンダの少女ジェシカの男性が大嫌いという気持ちに至った経緯を改めてまとめたことで、彼女の辛い思いを改めて感じた。二つ目のグループワークでは、男性被害者の被害の深刻さに、まとめることが難しく感じた。しかし、それをまとめたことで全く知識のなかった物事について、自身のなかに知識を取り込むことができた。

#### 平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

平和構築やジェンダー、国際協力といった問題は大きな課題であるからこそ、その問題を解決したいと思うことは簡単なことであるが、それに対して有効な働きかけができるかということは、非常に難しいことであると感じた。どこまでも、相手の側に立って考え、行動するということが大切であると感じた。

#### 今後の学習や研究に向けた抱負

私には、まだまだ知識が足らず、もっと現実に起こっていることについて調べなければならぬと感じました。今回の講義で学んだ、自身の想像以上の悲劇が起こる可能性があるということや相手の側に立って考えるという視点を忘れず、学んでいこうと思います。

齋藤 美咲

お茶の水女子大学 文教育学部グローバル文化学環 3年

#### 講義を通じて印象に残ったこと

一つ目に、アフリカでは男尊女卑という伝統的なジェンダー観が根強く残っていると同時に、変化や回帰が起きているということが印象的だった。その変化に貢献したのは、女性の政治面や社会面、経済面での活躍であることは注目に値する。しかし、ケニアにおいて2014年4月、一夫多妻制法が成立し、妻には拒否権も与えられないという伝統的なジェンダーをさらに強化するかたちで再興させたことを考えれば、それは女性を脅威に感じた男性側の反発が起きている可能性が考えられる。このような男性による女性の支配、抑圧という状況は、ジェンダーの問題でもあり人権の問題でもある。また、同性愛に対する規制もケニアで起こっており、最高で終身刑にまで至るといふ罪の重さに、アフリカの諸国家で保守的な動きが勢力を上げているように感じた。このような反発を受けながらも今後状況が進歩していくのか、停滞するのか、今後の経過が注目される。「進歩」といえば偉そうであるが、女性が構造的に抑圧されない社会が達成されることは最低限要求される。一国内の問題であれ国際的なイシューであれ、社会が何を目指すのか、対話を続けていく必要がある。

二つ目に、ジェンダーに基づく暴力(Gender Based Violence-以下 GBV)へのアプローチとして、第一にジェンダー観を見直し、第二に暴力という手段を変える、という表現が理解するうえでは分かりやすかったが、その過程には多くの挑戦と困難があるのだろうと感じた。紛争下では性暴力が武器として紛争の戦略として使われる。それによって主に女性には望まぬ妊娠や HIV/エイズ、精神的トラウマ、ひいては社会的孤立、結婚不可にまで影響を与える。紛争下では女性をこのような形で攻撃することにより、その集団の男性の自尊心をも傷つけ、コミュニティ全体を破壊する威力を持っているとは実に残酷だ。しかし、これが現実である。いちどそれが起こってしまったなら、支援は不可欠である。メディアの役割に言及すれば、爆破事件は国際的な視線も向けられやすいが、GBVなどの個人的なケースはいちいち報道されないことが多い。また被害者が積極的に打ち明けられる話ではない。そういうときにこそ、外部者が状況を説明、拡散していく役割を果たすのだろう。

### グループワークを通じて印象に残ったこと

紛争前、紛争中、紛争後で時期を分けて、ウガンダの少女がどのような暴力を受けたのかを分析して、彼女が常に種々の暴力にさらされていることを学んだこと、そして男性が性暴力を受けた例からその被害の特質や、支援の課題を探ったりしたことが最も印象に残った。そもそも発展途上国では貧困が多くの人々を苦しめるのに加えて、紛争下では社会的暴力や身体的暴力、精神的暴力が肥大化する。さらに、その被害者は主に従来は戦闘から保護される対象であった子どもや女性であり、状況の重さを増しているように感じる。

しかし一方で、紛争下において男性が性暴力の被害者となるということは知らなかったため、コンゴ民主共和国の男性被害者の事例には大変衝撃を受けた。自尊心を傷つけられ、アフリカ諸国の多くでは同性愛がタブーとなっていることとも相まって、被害者が被害を申告しにくい状況が生み出されていることや、病院や援助機関の少なさ、そこへのアクセ

スの仕方の認知度の低さが被害者を二重にも三重にも苦しめる要因となっていることを理解した。

JCCPによる援助の点で非常に興味深かったのは、コミュニティの啓発としてラジオが使われたということだ。特番ショーでは司法へのアクセスやGBVについて放送され評判がよかったそうだ。コミュニティラジオについては、東ティモールへのスタディツアーの際にも例をみたので、ひょっとしたら民衆に情報が伝わりやすい媒体なのだろうか、他国との共通点から好奇心が再興した。紛争後社会では失業者も多いことなどから有効活用できるのだろうか。

### その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

現地の人々のインタビューを写した映像はJCCPの活動とその成果を如実に映しており、外部者が平和構築に関わって草の根から状況を変えていくことができる例を見ることができたので、その活動意義に非常に感銘を受けた。地元出身者ではない、しかも裕福な国から来ている外部者が、現地の人々とどのように関わりを構築し、協力して平和をつくりだしていけるのだろうかということに、私はしばしば疑問を抱いていた。しかし映像から伺えたのは、プロフェッショナルな存在としてのスタッフと、その知識や経験を学び実践に移す有志市民との信頼関係であった。JCCPが現地の人々を育成することにより、アクターなしでも持続できるような状況を作り出せる。また前述したとおり、外部者は、内部者が叫ぶことのできない声を代理で伝えることもできる。それは現地で活動して人々と関わり合っているからこそ信頼性を得ることができるのである。そういう意味でも、社会を変えるために外部者の役割は一定の価値を持っている。

ジェンダーについて国内に目を向けてみれば、日本では女性の“活用”が提唱され始めている。しかし男性側の反動の存在や、社会のシステムが未だ女性の応援には不十分であること等によって、一般のジェンダー観を変容させるまでには至っていない。女性が男性と同様に権利を持ちうる社会をいかに構築できるのか、という点を男女共同で改めて考え直さなければならないが、そのような場はどこに生まれるのだろうか。私は2013年に都内で社会教育主事の実習に参加したのだが、そこでは男女が対等に話し合う場面もあれば、男性優位で議論をする場面もあった。だいたい男女が対等に議論できるのは、その女性が勝気・強気であること、男性側がその性格を受け入れられることが条件であったように感じた。社会教育は平和や人権など、さまざまな国内／グローバル・イシューを考える場となると私は考えているが、女性のエンパワメントや女性を引き立たせる状況を作らなければ結局男性優位のまま落ちてしまう危険性がある。それを念頭に置いて、さまざまな場で実践したい。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

紛争と平和構築を学ぶには、地域ごとの文化的、宗教的、経済的な差異などさまざまな

差異を考慮して研究していく必要がある。個々の事例を一元化することは不可能であって、つまり紛争解決は非常に多様で流動的な分野だ。フラットに考えるのではなく柔軟性を持ち続けたい。

私は現在、国際関係というマクロな内容を主に学んでいる。そこでは一事件のなかで政治家や国家がどのように振舞ったか、などの表立った政策決定や外交に目が行きやすくなりがちだ。このような領域を学ぶからこそ、伝聞であっても、そこでどのような人がどのように苦しみ、その後どうなったのかまで知り、考えることを忘れないようにしようと、改めて思った。

ジェンダーに基づく暴力などの実態はタブーとされ、語られないことがある。そうして、被害者の叫びが押し込められていく状況を作り出す社会は恐ろしい。ジェンダー観など、その風土の伝統的な慣習や文化の変容を外部者が押し付けることはできないが、外部者の思う悲惨な状況を外部に伝え続けることで、平和のための国際的な協力が得られるように感じる。そこにおいて SNS やブログなどは大きな役割を果たすし、若者のニーズもあるように感じる。

今回のセミナーは、具体的な事例から紛争における暴力を学んだことによって、自分が何のために学ぶのかを考えなおすきっかけとなった。

## 鄭 旦丹

### 奈良女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 M2

2014年6月28日に、お茶の水女子大学で行われた「平和構築とジェンダー」イベントに参加させていただきまして、誠にありがとうございます。出席者が積極的にワークショップに参加することで、とても有意義な機会となりました。そのような場に私も参加することができ、大変勉強になりました。

ジェンダーに関する授業はこれまでに受けたことがありますが、「ジェンダー」という言葉は学問的なものであり、実世界との関わりがあまり感じられないというのが今までの私のイメージでした。しかし、今回のワークショップに参加することで、社会的・歴史的・文化的性別である「ジェンダー」の影響は我々の生活のあらゆる方面に現れていることを知りました。また戦争あるいは紛争に巻き込まれる「ジェンダー」の表象についての講義はとても印象的でした。

講義では最初にアフリカと日本のことわざを通じて、それぞれの国のジェンダー観が紹介されました。ことわざはその国の人々の生活経験から生まれた言葉であり、その国特有の文化を見ることができます。アフリカのガーナのことわざ「A woman is a flower in a garden, her husband is the fence around it.」と日本のことわざ「男は度胸、女は愛嬌」とは、どちらも同じく女性の弱さを強調することで、守られる存在としての女性が位置づけ

られています。ガーナと日本は異なる文化をもつ国なのですが、ジェンダー観が似ていることに驚きました。また、現在のアフリカではジェンダーの問題を揺さぶるような深刻な実態に陥っていることが分かりました。ケニアでは、今年四月に一夫多妻制法が成立し、加えて妻がそれに対する拒否権がないという法律も成立しました。ウガンダでは、今年の二月から法律で禁止されている同性愛行為に、最高で終身刑が科されるようになりました。そういった厳しい状況を目にして、日本紛争予防センターのスタッフの皆さんが現地に赴き、様々な困難を乗り越えて、暴力を振るわれた女性に精神的治療を施したり、村の紛争を未然に防いだり、紛争によって被害をうけた人びとの心の傷を治す、カウンセリングを提供できる現地の相談員を育てることに取り組んだりしていることを知りました。そのようなスタッフの方々の姿を見て感動する一方で、自分も行動をしなければいけないと分かりました。

私の育った故郷と今留学している日本は、経済も社会も発展していて、「男尊女卑」などの男女不平等を感じる出来事はあまり見かけていないので、男女平等は当たり前のように世の中に貫かれているのではないかと思っていました。「平和」という概念も当たり前のようによく考えており、戦争や紛争が一体どのようなことなのか、人びとにどのような影響を及ぼすのか真剣に考えていませんでした。戦争の残酷さを経験した人こそ、平和を手に入れることの難しさを感じることができると言われていますが、我々戦争を経験したことのない人間に平和の大切さを感じさせるために、今同じ空の下で暮らしているにも関わらず戦争の被害を受け、生きることさえ精一杯な人びとがいることを知るのは非常に重要です。アフリカの多くの国々は今も戦争下にあり、食料品の不足、医療の遅れ、子供たちにとって不十分な教育環境など深刻な社会問題の中で、女性が受けている被害が世間に忘れられがちです。アフリカの女性たちは戦争や貧困の被害を受けるのみならず、性暴力を振るわれる対象となる可能性もあるためです。いわゆる「紛争下のジェンダーに基づく暴力」を振るわれる被害者となりうるのです。紛争状態に陥る村の人びとは精神的にとっても不安定なので、夫が妻に暴力を振るう可能性が大幅に増えます。そのような女性たちを救うために、紛争をやめさせるのは一番根本的な方法だと思います。紛争を減らすために、日本紛争予防センターのような NPO 団体の存在はかけがえないものですが、やはり国際社会の支援も必要です。先進国にアフリカへの援助を呼びかけなければなりません。

講義の中で、一番ショックを受けたのは男性が紛争中性暴力を受けるという事実です。男性は一般的にレイプを行う加害者のイメージが強いため、被害者となることがないように思われがちです。そのため、男性被害者の存在が世間に知られず、彼らに対する援助も恐ろしいほど少ないのが現状です。とくに同性愛が禁止されるアフリカでは、同性にレイプされたら、その男性は身体の苦痛を忍びながら、アフリカ社会からの蔑視の眼差しと戦わなければなりません。体の治療をしてくれる病院も少なく、心の苦悶を吐き出し、心の傷を治してくれるような機関もない環境で、被害を受けた男性たちはどのように生きていけば良いのでしょうか。男性被害者に焦点を当てる呼びかけは焦眉の急です。

ワークショップに関して印象に残ったのは、最初の「他己紹介」です。初めて経験したので少し緊張しましたが、短い時間を使って、隣に座っている人の基本情報が分かったし、自分のこともコンパクトに紹介する事ができました。さらに、皆に隣の人を紹介することで二人の関係が親しくなり、その後のチームワークを順調に行うための準備にもなります。ワークショップをする中で、それぞれの地域から来た女の子たちがグループで協力し合っ  
て、課題を解決できたことも印象的でした。皆が積極的に提案したり、悩んだりして、最後には自分のグループの意見をまとめた一枚の紙が出来上がった瞬間、チームワークの素晴らしさを感じました。



「頭で考えたこと」



「心で感じたこと」



「今後行動したいこと」

写真で示した通り、講義の最後には自分の意見を頭に留めるだけでなく、目に見える形で書きました。授業で教えてもらった知識をすぐに自分のものにし、自分の考え方の変



化に気付かせるのが、この授業の特徴だと感じました。

中国には、アフリカのような貧困地域がまだ存在しています。中国は広いですが、なかなか世間に知られることのない厳しい環境の下で暮らしている人たちの姿をどう発見し、人々の注意を促すのかは課題だと感じています。

四時間の講義はあっという間に終わりましたが、とても勉強になりました。講義を終えて、身の回りのことだけに気を配るのではなく、自分の視野を広げ、世界で起きていることにも関心を持つことで、自分がこの世界でどのような役割を果せるのかを常に考えるようになりました。これが今回のシンポジウムの一番示唆的なところだと思います。

## 橋元 絢香

### 宮城学院女子大学 学芸学部国際文化学科 3年

私は、「平和構築とジェンダー」という講義を聞き、今まで深く考えたことがなかったことを考えるきっかけとなりました。

その一つとしてあげられるのが「平和構築」という言葉です。「平和構築とは何か？」と考えたとき、まず出てくる疑問が「平和」とは何なのだろうということでした。平和というものがどのようなことなのか、その正解はないと思います。国、人、社会によって考え方が、生活様式、様々なことが異なります。その場その場で平和というものは違うもので当たり前だと感じました。だからこそ難しい問題だとも思います。平和というものが違う限り「平和構築」の仕方は地域によって変わってくるからです。次に「紛争」とは何なのだろうか？という疑問が生まれます。私が今までに考えていた紛争というものは、大きなもので、戦争などといったものでした。しかし、この講義で学んだこととして、紛争というのは二人で対立していることを指し、例えば口論などの小さなことでも紛争ということを知りました。この紛争がおきたときに大概のものは解決しますが、解決できなかったものを予防すること、紛争予防こそが平和構築なのです。

次に、この講義で印象に残った講義が二つあります。それはどちらもグループワークで行われました。その内容は、ジェンダーに関する物語を読み、グループ内で話し合い、意見をまとめるというものでした。

一つ目の物語は、ウガンダのルウェロ村の少女ジェシカの物語でした。この物語の内容は、ジェシカが住む村が紛争にあい、両親を失い、ジェシカはレイプされ、その後の暮らしが困難になるというものでした。この中でジェシカには兄弟がいました。その兄弟は生き残り、その後普通の生活を送ることができましたが、ジェシカはレイプというものにあい、自分がレイプをされたということを他人が知っていることにより偏見な目で見られ、ひとりで生きていくことが困難になるというものでした。そしてジェシカは男性が大嫌いになってしまうという物語です。この物語を読んだとき、事実だということに驚きました。

そしてジェシカと同じ女性として考えたときに、紛争が終わっても、心の傷は一生残るものであり、胸が痛くなりました。男性と女性、世の中には二つの異性が存在し、見た目、体のつくり、ほかにも異なることはあります。その中で女性が弱い立場にいる状況が多く見られるのが現状ではないかと思いました。この物語も女性であるジェシカが弱い立場にありました。どうにか異性の差別をなくすことができないものか、とも考えました。しかし、グループワークで話をしていくうちに、大切なことはその後のジェシカの心のケアをすることだということに気づきました。「平和構築」心のケアもその一つなのです。

そして二つ目の物語は、コンゴ民主共和国の男性被害者の事例でした。先ほどは女性が被害者でしたが、この物語は男性が被害者でした。この物語の内容は、アフリカで紛争が起きた際に、男性がレイプ被害を受けたというものでした。今まで私はレイプの被害者は女性のみだと思っていました。しかし、この物語を読み、レイプ被害者が男性にもいるということを知りました。男性が男性に性的虐待をするのです。想像できる範囲は限られてくるものでした。ここで起きる問題は、女性がレイプ被害を受けたときとは異なる問題が多々ありました。その一つは、レイプを受けた被害者の男性が、被害を受けたことを口に出せないでため込んでしまうということです。その理由のひとつは、被害にあったことを話すことにより、同性愛者だと思われるという恐怖があるからです。多くのアフリカでは同性愛はタブー視されているため、同性愛者ではないかというレッテルを貼られるのを恐れているのです。二つ目は性的虐待を受けることによって、性器が傷つけられ、その後も痛みを苦しむというものです。このようにレイプ問題というものは女性に限らずに起こっているものです。大切なのは起こった後のケアだということ、それは女性男性両方に言えます。心のケアをその場に合った対応ですることこそが平和構築につながるのではないかと思います。

最後に、昔は男＝強、女＝弱という傾向にある世の中でしたが、現代では平等になりつつあると聞きました。このような社会にするために貢献している人々や団体は沢山あると思いますが、その中の一つとしてNPO法人のJCCPという団体が活動していることを知りました。どんな小さなことでもいい、自分が今できることを行動にうつして平和構築に自らも貢献していきたいと思いました。

**林 理絵**

**聖路加国際大学 看護学部看護学科 2年**

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は今の大学に入学する前に別の大学で国際政治を専攻していたのだが、そこでの学びから、平和構築といえば、PKO活動としての軍の展開を連想しがちであった。今回の講義では草の根レベルでもやれること、草の根レベルだからこそやれることがあるということ

を知り、それが私にとっては新しい発見であり、印象に残った。トップダウンの政策ではなく、紛争の被害者になった方ひとりひとりとの人間的な関わりを通して、ひとりひとりをケアしながら、紛争の繰り返しを防ぎ復興につなげるということは、草の根レベルでの活動だからこそ出来ることだと思った。

性的な被害に遭われた方々の中には、本人の心理的問題、土地の文化、経済状態などが原因で医療にすらアクセス出来ない現実があるということは、これから医療職に着くものとして忘れてはならない事実であると感じた。普段の学びではいつも、ケアの対象として病院にいられた方や、在宅看護を利用する契約を結ばれた方を考えがちであったが、途上国ではもちろんのこと、格差の広がる日本でも、病院に来る事が出来ない人までいかに医療を行き渡らせるかという課題について、行政や保健師との連携のもと病院の中からも活発にアクションを起こして行くことが必要であると感じた。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、国際政治を専門とする方だけでなく法学や文学など様々な専門分野の方も集まって意見をかわす事で、政治的観点に偏る事の無い、より市民に近い価値観で事例検討することが出来たと感じた。それと同時に、自分では思いもつかなかったような観点からの発言を聞くことが出来て面白かった。

例えば性的な暴行を受けた男性と女性では、それぞれが受ける被害の違いにどのようなものがあるかという問いについては、私はまず生物学的な観点から考えたが、他のメンバーはより社会的・心理的観点から問題を考えていることが面白かった。また、事例から読み取れる各登場人物の身に起きた出来事について考えるとき、私は事例に書かれていないことを想像して書くことに抵抗を感じたが、他のメンバーは全員そのようには感じていないようだった。その様子を見て、私は普段明確な根拠のない想像を事実として情報収集することはしてはいけないと教えられているから、自然と「想像したことをあたかも事例に書かれていたかのように書いてはいけないのではないか」という思考回路になってしまったが、この思考回路がいつどの場合にも適切であるとは言えず、むしろわからないことについていかに想像力を巡らして推測していくかが試される場合もあるのだということを悟った。

### その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

草の根レベルから平和構築をする手段があると知った今、看護師として平和構築に携わるなら草の根レベルでの活動をするのが適していると考えられるようになった。なぜなら、看護師は患者ひとりひとりを全人的にケアする仕事だからである。講義でお話いただいたような、被害に遭われた方ひとりひとりの精神的、経済的、身体的苦痛を理解し、共に前進する方法を探して行く手法は、看護師がしているケアと重なる所がおおいにあると感じた。看護師がする国際協力といえば助産、というイメージがあったが、国際 NGO で活動する道

もあるのかも知れないと感じた。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

今後私が国際平和の道に進むかどうかは未だ検討中であるが、その道に進むにせよ、進まないにせよ、大切にし、追求していきたいと思えることを今回の学びから再確認することが出来た。それは、ひとりひとりが思う幸福な人生の実現に貢献したいと思う気持ちである。戦地でも、病棟でも、そこで人々が直面するのは、自分の生や健康が失われてしまうかもしれないという危機であると思う。そのとき人々に必要な事は、まずは危機を乗り越える事、そして危機を乗り越えた先の人生をいかに全うしていくかということ、あるいはもうその人の人生が終わってしまうなら、その人生と自分を肯定するという事だろう。私はどこにしようとも、そういう過程に身をおく人々の支えになるような存在でありたいと思う。そのために今後も分野を問わず、自分の可能性に自分で上限を付ける事無く、学び続けて行きたいと思う。

### グループ 4

大久保 萌（創価大学経済学部 2 年）

本田あや（津田塾大学学芸学部 1 年）

中村愛（聖路加国際大学大学院看護学研究科 M1）

中村千鶴（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 M2）

藤本香菜（お茶の水女子大学理学部 2 年）

大久保 萌

創価大学 経済学部経済学科 2 年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

講義の流れにそって、感じたことや考えたことを述べることにする。

まず、「アフリカのことわざから見えてくるジェンダー」という講義では、アフリカも日本も「男性は強く女性は弱い」という考えが古くからあるということを学んだ。最近の日本の家庭では、この考え方は変わってきており、女性のほうが力をもつことが多く、ジェンダーは時代によって変わるということも改めて学ぶことができた。また、私はアフリカの地域では女性の社会進出が進んでいないと思っていたが、女性が議員になっている割合をみると、日本の議員率のほうがケニアやルワンダのそれよりはるかに低く、この事実は大変な衝撃だった。しかし、ケニアの一夫多妻制の法律成立に関する話を聞くと、ただ単

に女性の議員率が、社会から女性の人権などが認められていることを必ずしも示すものではないと感じた。なぜなら、妻が夫に複数の妻を持つことを拒否する権利が、男性議員によって奪われたからである。今後、日本を含む世界各国は、名目的な女性の社会進出だけを向上させるのではなく、実質的な女性の社会進出により主眼をおき、改善させる必要があると考えた。

次に行われた「平和構築とは何か」の講義では、まず「紛争」というものは必ずしも武器を伴うわけではないことを知った。日常どこの国でもある口論も「紛争」として考えることは非常に新鮮だった。また、平和構築とは何を指すのか理解できずにいたが、紛争終結後に紛争の再発を防ぐ動きを指すということも学べた。平和構築という段階に至るには、まず紛争を解決しなければならないが、それは非常に難しいものであるため、平和を構築するということはそれ以上に難しいことであると改めて考えさせられた。また、平和構築の一つの活動として、JCCPは紛争地域の住民をカウンセラーとして育成したという話を聞き、JCCPなどの支援が終了した後でも住民が自分たちの力で生きていけるようにしているのだと感心した。「紛争の被害者を平和構築の担い手に」という言葉にも非常に感動し、これは持続可能な平和構築と言えるのではないかと思った。

また、「ジェンダーに基づく暴力」では、暴力には5種類あり、その1つに経済的暴力があるということを学んだ。夫が妻に稼ぎを分けないということ「暴力」ととらえるということは新たな知識として蓄積された。加えて、1つの男女間に起こる問題には複数の種類の暴力が絡むということも知り、問題を解決するには1つ1つの暴力の種類に合う解決策が必要であると考え、問題の解決は容易ではないと改めて思った。

「武器としての性暴力」について学んだことも非常に印象に残っている。敵国の女性に対し性暴力をふるうことは、男性の自尊心を傷つけ、士気を低下させることにつながる。やがてそれがコミュニティの弱体化を起こさせるため、性暴力が有効な手段として使われているということだった。意外にも戦略的であり驚いた。同時に、紛争と性暴力の密接なつながりを理解した。紛争は、国に対してハード面でもソフト面でも深い傷を残すのだと知り、紛争予防と平和構築の重要性を認識した。

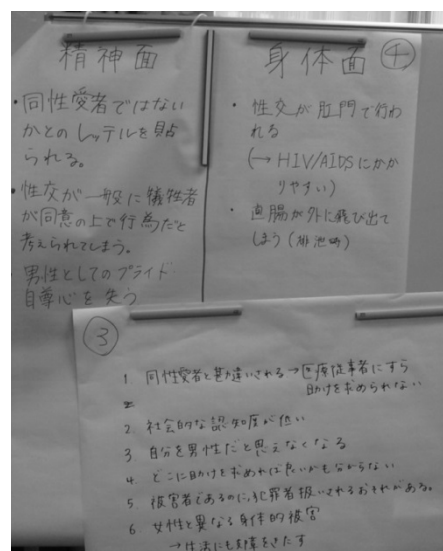
### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

最初のグループワークでは、女性と男性で紛争中と紛争後では状況が違うということを知った。やはり女性がいつも苦しい状況に置かれると知り、1人の女性として心が痛んだ。次に行われたグループワークでは、男性が男性にレイプを行うという事実を知り、今までそのことを全く知らなかった私にとって、その衝撃は非常に大きかった。レイプという言葉を知るとき、当たり前のように女性の被害者を想像し、女性に同情し、男性を憎むが、男性の被害者がいることを忘れてはいけないと思った。男性同士のレイプには、男性だからこその苦しみ、たとえば同性愛者だと思われたり、両者の了解のもとで行われたと思わ

れたりするという苦しみがあり、女性よりも被害の声をあげにくい状況にあることを学んだ。

<写真：グループワークⅡ

「5. 男性被害者」男性特有の困難>



## その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

紛争やジェンダーという問題は、非常に複雑であると考えた。私は高校時代より国際協力に興味はあったが、その興味のほとんどは食糧不足やインフラ不備などの貧困問題にあり、紛争やジェンダーについては貧困問題ほど興味を持っていなかった。しかし、今、それらの問題にも深い関心がある。そもそもなぜ性差は生まれたのかという疑問がある。そして、子孫を残す・新たな生を育むための生殖器官がなぜここまで乱用されなければならないのか疑問である。性暴力で幸せになる人は一人もいなく、問題の悪化にしかつながらぬのに、なぜ気づけないのかも疑問である。私は、その原因の1つには教育を受けているか受けていないかが深く関係すると思う。以前、大学の授業で児童婚について調べ、プレゼンテーションを行ったことがあり、教育を受けた子供とそうでない子供とで、結婚の年齢に違いがあることを知っていたからである。しかし、日本という、ほとんど全員の子供が高い教育レベルのもとに教育されている国であっても、女性の社会進出にみられるようにジェンダーという問題は存在する。このように、ただ教育をすれば良いというものでもないため、非常に複雑困難な問題であると思った。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

大学の授業や教科書だけでは、世界の現状を知るのに十分ではなく、実際に現地で働いている人の話を聞くのが一番であると思ったため、今後も今回のようなワークショップなどがあれば積極的に参加し、知識を深めたい。高校時代からの国際協力への意欲がさらに高まったため、世界の現状について知る中で自分が最も貢献したいと思うものを発見し、それに貢献できるよう勉強をしていきたい。また、今回学んだことを友人に話し、世界の現状を少しでも多くの人に伝え、自身と同じように国際協力を志す友を増やしていきたい。

本田 あや

津田塾大学 学芸学部国際関係学科 1年

## 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は「平和構築とジェンダー」に出席して、初めて知って驚いたことや、感じたことがいくつかあります。一つ目はことわざについてです。私はアフリカのことわざと日本のことわざの意味はそこまで違いがないと思いました。アフリカも日本も、ことわざからみれば、どちらも男性のほうが強い社会という印象を受けます。しかし、現在の日本はまだまだ差別はあるにしろ、次第に男女平等の考えや行動が広まってきているので、本当のアフリカの現状と比べるべきものなのだろうかとも思いました。アフリカでは女性に対する差別の問題意識が広まってきているとも聞いたことがあります。その意識をもっと広めるにはまだまだ時間がかかるだろうと感じました。そして、アフリカで差別問題に対する意識がどこまで浸透しているのか実際に現地に行って見てみたい、調査してみたいと強く感じました。二つ目はアフリカにおける同性愛に対する考え方についてです。私は、アフリカ 54 か国中約 38 か国もの国で同性愛が法律で禁じられていると初めて知りました。ウガンダでは同性愛に最高で終身刑が科せられ、同性愛を助長する行為にまでも罰則が科せられるということで、ここまで同性愛に対してきつい態度を示す地域が他にあるだろうかと感じました。これでは、もっと自由に生きたいと考えている人の自由を拘束しているようなものだと感じました。三つ目は、「紛争」の定義です。私は今まで紛争とはお互いに対立しあう集団同士が武器を用いて対立しあうことだと考えていました。しかし本当は武器を用いていなくても、何人かの人間がそれぞれ異なる意見を持って対立しているというだけで「紛争」ということを知りました。そうだとすれば、今の世の中には紛争がたくさんあるということを実感しました。

そして何より一番印象に残ったことが、男性へのレイプも存在するということです。私はこの事実を初めて聞いた時、とても驚きました。そして、レイプは男性が女性にするものだとはばかり考え、少し被害者意識をいじめてしまっていた自分を恥じました。この私のように、男性に対するレイプが存在することを知っている人は本当に少ないと思います。そのため人々はこのことを理解しづらく、知った時点で、その男性に対して偏見を持ってしまうのだと思います。世間がこのような状態であるということ、そして男性は自尊心をひどく傷つけられて、支援する人々にこのことを言えず、支援する人は支援がしにくくなるという事実を知りました。そこで、私は少しでも早く、そして少しでも多くの人にこの事実を知ってもらいたいと思い、「平和構築とジェンダー」があった日に、Facebook にこのことを書かせていただきました。ジェンダーと聞くと、女性だけのことを考えてしまいがちですが、男女どちらのことも考え、どちらの問題ともしっかりと向き合っていていかなければいけないのだということを考えることができる良い機会になりました。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

私はグループワークを行うことで、その時に互いの知識も深め合えるのだということを感じました。私は今までグループワークは仲間と協力して親睦を深めることができるものだという考えがあったのですが、「平和構築とジェンダー」でのグループワークを通して作

業を一緒にする中で、お互いの知識を交換し深め合えるということを実感しました。私がいたグループには、大学院生の方や、大学 2 年生の方がいました。その方々は、私よりもとても知識が豊富なため、私に、私が今まで知らなかったセカンドレイプに関することなどを教えてくださいました。また、グループ内でお互いが知っていることを出し合い、考えあうということができました。そして、グループワークがあったから、「平和構築とジェンダー」にもっと積極的に参加し、考えを深めることができたのだと思います。

### その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

今回のイベントを通して、私はレイプ被害者など、様々な人の心のケアの重要性を実感しました。そして、より多くの人の心のケアができる環境をつくるためにも、現在世界で起こっている事実をより多くの人に知ってもらい、偏見などを持ってもらわないようにすることが大切なのではないかと考えました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

「平和構築とジェンダー」を通して、私はまだまだ知らないことがたくさんあるのだと感じました。もっと多くの事実を知り、考えることができるように、様々な本を読んだり、NGO や JICA、大学などの講演会やセミナーがあったら、積極的に参加していきたいと思います。そして、バイトをしてお金が貯まったら、自分の足で実際に現地へ赴き、自分の目で、耳で、肌で感じ、人々の立場に立って物事を考えていけるようにしたいです。そして、現在起こっている問題をどう解決していくべきかをもっと具体的に考えていけるように、今大学で学んでいることをできる限り知識として蓄え、足りないと感じることは自分から積極的に学んでいきたいと思います。「平和構築とジェンダー」に出席させていただき、得るものがたくさんありました。本当に良かったです。

中村 愛

聖路加国際大学大学院 看護学研究科 助産学上級実践コース M1

今回の「平和構築とジェンダー」を通して、平和構築の重要性を認識しました。また、今まで紛争というと民族同士の対立、内戦、宗派の対立などを思い浮かべていましたが、イベントを通して紛争は私たち日常生活の身近にたくさんあることがわかりました。性暴力の男性被害者の事例は心を揺さぶるもので、紛争の戦略として、武器として性暴力を取り入れる人間の非道さに憤りと虚しさを覚えました。敵対するコミュニティを今だけでなく先のことまで見通して破壊するために、性暴力を使っているということでしたが、被害者はもちろん、性暴力をしている加害者側も、心の中でそうせざるを得ない様々な葛藤を抱えながら行ってしまう場合もあるのではないかと少し思いました。性暴力の被害にあっ



た人たちは決して完全に癒えることのない傷を持ち、PTSD やアルコール中毒、薬物中毒、自殺のリスクも高く、経済的にも苦しい生活を迫られます。自分の存在や生きていくことに価値を見いだせなくなることもあります。自分たちのコミュニティに性暴力の被害者がいると、穢れているとって追放してしまう村民たちの存在も、性暴力の被害者を孤立させていく一要因であると思います。難民キャンプでは、紛争によって家を失い、行き先がない人たちが一緒に暮らしていく場であるにも関わらず、その中で性暴力が行われることもあります。人々の生活水準がある程度満たされないと、己の欲望を満たすために、力を誇示するために、暴力という手段に訴え出してしまう人もいるかもしれないと思いました。

今回のグループワークを通して、それぞれの専攻によって平和構築における視点が異なることが分かりました。紛争後の平和構築、紛争予防を行うためには、様々な角度から多分野の専門職が連携して支援をすることが望まれると改めて実感しました。現地に根差した活動を行うためには、地域の特性、政治、警察、司法、医療の仕組みを知り、海外からの支援者がいなくても現地の人たちだけで活動していけるような支援体制、関係機関との連携のネットワークを構築し、被害者の人たちに可視化できるようなメッセージを発信することで、様々なケアができると思いました。

長い歴史の中で様々な対立があったからこそ、現在も紛争がなくなるののだとは思いますが、“目には目を、歯には歯を”の思想では、復讐の芽を育ててしまうだけで現状を何一つ変えることはできないのではないかと思います。自分や自分の家族、友人にされて嫌なことは相手にはしないという考えが広まれば少しでも紛争の抑止になるのではないかと思います。なかなか理解を得るのも難しいと感じ、紛争を予防するために一体何が支援としてできるのか、自問自答しています。紛争によって自分たちの宗派、富、栄光、権力の誇示を実現できるかもしれませんが、一方でその背景には様々な自分たちと関わりの深い人が性暴力の被害にあっているかもしれません。紛争が長期化することによって、生きていくために自ら身体を売る人や、弱い立場とされる女性、少女も兵士として強制的に動員されてしまいます。少年や男性も長引く紛争によって、性暴力の被害者になってしまうこともあります。この現状をどれほどの人々が知っているのでしょうか。生活で最低限の水準が保たれていないと、心に余裕が持てず、自暴自棄になったり、必要以上に自分を強く見せようとしたりして暴力に出してしまうことがあると思います。ある程度の健康水準と教育水準を保つことは、現時点の人々の生活の質を向上するだけでなく、今後の紛争を予防していくという点でも必要なことだと思います。互いの意見に食い違いが生じた時に、暴力に訴えでることをやめ、話し合いで解決していく方法もあると伝えるためには、ある一定水準の教育が必要だと思います。教育を行うためには、教育が受けられる健康水準があることが求められます。医療水準が低ければ日々生きていくことに精一杯で、教育を受けたくても受けられない状況に陥ることが考えられます。教育を行うためにはまず最低限の健康水準の確保を行い、そして教育と医療が相互に連携し支援していくことも、平和構築のために必要なことではないかと思いました。

国際協力では、様々な専門家が連携しあって支援を行います。その際医療者は個人の生活と疾病の両方の観点からアプローチできます。疾病と生活は切り離すことができません。心に負った傷は、周りに隠そうとすればするほど、自らの身体を蝕んでいきます。被害にあったこと、苦しんでいることを声に出してなかなか発することのできない人たちを、精神的な観点だけでなく身体的な観点から早期発見することが医療者には求められると思います。PTSD やアルコール中毒、薬物中毒を治療していくのは本当に大変なことです。こうなる前に被害にあった早期の段階から様々な支援者が連携して個人のサポートをしていくことが必要だと思いました。

中村 千鶴

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 M2

認定 NPO 法人日本紛争予防センター(JCCP)の取り組みとジェンダーに基づく暴力に関心を持っていたため、本ワークショップに参加して、とても勉強になった。講義の導入部分では、ガーナやソマリアの諺と日本の諺から、各地域で時代によって移り変わってきたジェンダー規範を学んだ。しかし、最近は一夫多妻制法や同性愛禁止法の成立によって、ケニアやウガンダを始めとしたアフリカの多くの地域で伝統的ジェンダー観への回帰とも思われる状況があるようだ。一般的に軍事化の進んでいる社会において、伝統的ジェンダー観が強調される場合があるが、アフリカの様々な地域で見られるジェンダー観の揺らぎの背景にどのような要因があるのか、より深く考えてみたいと思った。

また、グループワークでは、ジェンダーに基づく暴力の事例を、時間軸と事件の被害者・家族・加害者・関与者の行動を通して把握していく作業が印象に残った。1つの事例をこのように整理し、根本的かつ潜在的な問題を洗い出すことは、実際の援助現場でとられている手法なのではないだろうか。今日のグループワークでは、ウガンダ・ルウェロ村の紛争で兵士にレイプされた少女の物語を読み、紛争前、紛争中、そして紛争後の各アクターの行動を模造紙に書きだしていった。

もう 1 つのケーススタディは、コンゴ民主共和国で起こった、ジェンダーに基づく暴力の男性被害者の事例だった。イスラム教国における男性のレイプ被害者は、同性愛者だと思われるのを恐れて、沈黙してしまうケースが多いそうだ。私は、組織的な軍事戦略としてのジェンダーに基づく暴力が男性を標的にしたケースはこれまで聞いたことがなかったため、衝撃を受けた。そこで、グループで話し合い、男性特有の苦しみを想像し挙げていった。グループの参加者の知識とバックグラウンドは多様であり、私の考えが及ばなかった意見がたくさん出た。将来、途上国で助産師の仕事をしたいという方もおり、そのような人とグループワークで意見交換をすることは、とても刺激になった。

現在、私はアフリカ・ルワンダ共和国で1994年に起きた大虐殺後にローカルレベルで行われた「ガチャチャ裁判」について研究をしている。ガチャチャ裁判においてもジェンダーと平和構築は主要な課題の1つであったと考えているため、ワークショップの最後に紹介されたソマリア・プントランドの国内避難民キャンプでのJCCPの活動は非常に参考になった。ジェンダーに基づく暴力を受けた人が司法、正義へアクセスし、尊厳を回復することのできる環境をいかに創るか。ワークショップを終えて、今後も勉強を続けて、平和な社会づくりに少しでも貢献していきたいと考えた。



写真1 ワークショップを終えて、参加者が心で感じたこと

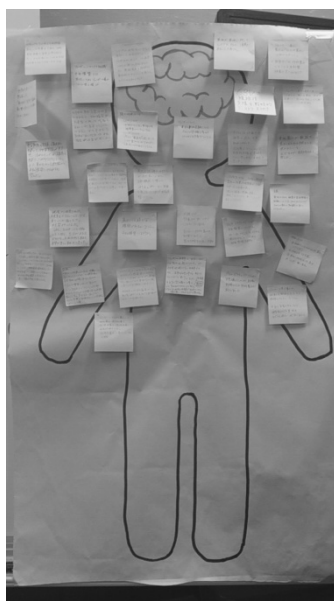


写真2 頭で考えたこと



写真3 今後行動したいこと

## 藤本 香菜

お茶の水女子大学 理学部生物学科 2年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

一番印象に残ったのは、男性のレイプ被害者がいるということです。今まで男性の被害者のことは聞いたことがありませんでした。また、人数的にも多くの方が被害に遭われていると知りショックでした。

その他には、またレイプ関係のことですが、レイプが紛争や戦争の一戦略となっていることです。今まではなんでそんなことをするのだろうかという疑問に思っていたのですが、今回の講義で、敵集団の女性をレイプすることで敵集団の男性の自尊心を傷つけ士気を低下させ、そのコミュニティ全体を崩壊させるといった、武器としての性暴力があると知りました。

また、ジェンダーに基づく暴力も思っていたよりも多くの種類があり驚きでした。紛争や戦争が長引くと伝統的ジェンダー観が強調されこのような暴力が増えていくと言っていました。現代の日本の中でもまだジェンダーによる偏見が残っていると感じることもあります。これを改善していかないと暴力に発展しないとは言い切れないと思いました。また、このような暴力がある地域で改善するため指導しようとする時、その国・地域の伝統的な文化やジェンダー観があるので指導は簡単には受け入れられないと感じました。ですので、JCCPが紹介していたように、その土地の人を指導できるように養成し地域の平和構築に取り込むことはとても効果的なのだと分かりました。

講義全体を通して、平和構築のためにお金が必要なのはもちろんですが、お金だけを援助するのではなく、少しの工夫で働きかけの効果が大幅変わってくるのだと思いました。例えば、識字率が低い地域なら看板で呼びかけを行うのではなくラジオ放送で呼びかけを行うとか、被害者を見つけたらこちらからケアをしてみてもどうかと働きかけるとか。特に最後に出てきたソマリアのお話で、紛争被害者を助けたいならまず被害者を捜すことが最初の一步であると聞き、本当にお金ではなく人と人の繋がりや、人から人への働きかけが重要だと感じました。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

レイプのテーマのとき二つの課題についてグループワークを行いました。その時に感じたことは、自分では気付かないようなことに他人が気付いてくれ、自分とは違う解釈を他人がするというものでした。このように他人と話し合い、他人の意見に耳を傾けることは何か大きな問題を解決する時にはとても大切だと思うし、私たちの日常で起こっている小さな紛争が大きくなるのを防ぐこともできるかもしれないと思いました。

## グループ 5

岡美雪（聖路加国際大学大学院修士課程 M1）  
長内夕陽（国際基督教大学国際教養学部 3年）  
五十嵐由華（お茶の水女子大学文教育学部 1年）  
木村翠（お茶の水女子大学文教育学部 1年）  
佐藤幸恵（創価大学文学部 2年）  
富永理沙（上智大学法学部 4年）

岡 美雪

聖路加国際大学大学院 助産学専攻 M1

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

今回「紛争下のジェンダーに基づく暴力」という講義の中で、自分の学びが大きかった。

まず、「ジェンダーに基づく暴力」とは、ジェンダーに基づいて、個人もしくは集団を対象に行われる暴力(Gender-Based Violence : GBV) と定義される。ジェンダーに基づく暴力は主に 5 つ(性的暴力、身体的暴力、経済的暴力、精神的暴力、社会的暴力)に分類される。この 5 つの暴力に関しては、紛争下だけでなく現在の日本社会の中でも起きていることであり、日本以外の先進国や開発途上国でやはり起きていることである。その土地の慣習や文化に基づいて思考や方法の差はあるが、起きているという事実は認識すべきである。

それが、紛争下の場合、現れる暴力はどのようになるのか。その構造を知ることができた。紛争により治安が悪化し犯罪が増加する。犯罪には性犯罪も含まれる。紛争下では、権力を誇示するという状況におかれ、力の優位を示すという暴力がまかり通るようになる。軍事化が進み、また単に軍事化・軍事費が増大するだけでなく、社会における価値配分の方法や様式として強権・物理的強制力に依拠する度合いが高まってくる。それにより、伝統的なジェンダー観がより強調されるようになる。例えば、アフリカの国などでは男性は強く女性は弱いため男性は女性を守るものというもの、また男は外で働いで稼ぐ又は戦い、女は家で家事や育児を行うなどのジェンダー観が紛争下はより強調されるということになる。

このような紛争下では、武器として性暴力を使うようになる。戦略としての性暴力が効果的な武器になるのだ。性暴力を受けた女性は、望まぬ妊娠、HIV/AIDS、精神的トラウマのリスクに晒され、家族からも社会からも疎外され孤立し、離別や結婚できないといった事態、自殺をも引き起こす。紛争下で戦に出ている男性に対して、その妻や子ども、姉妹、母親、親戚などに敵側の兵士による性暴力という武器を使うことで、男性の誇りや自信を失わせ精神的ダメージを効果的に受けさせることができる。敵対集団の女性を凌辱することで、敵対集団の男性の自尊心を傷つけ士気を低下させ、コミュニティ全体を崩壊させることができる。

このような悲惨な事実が起きている。紛争下の性暴力が治安の悪化によるものだけでなく、効果的な武器として使われているということに衝撃を受けた。ジェンダーの性差や文化的な役割を攻撃することで、性暴力を受けた女性だけでなく、その女性を大切に思っている男性までの精神的な傷を限りなく深くできるということなのだ。これほどまでの精神的トラウマを癒す方法はあるのだろうか。多くの人が心の中に大きな傷を負ったまま癒されずに生きているだろうということを想像する。また反対に、紛争下の異常な精神状態で、人間はどこまでも残酷になれるという恐ろしさを知った。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

コンゴ民主共和国の男性の性暴力被害者の事例を用いて行ったグループワークで、男性が受ける性暴力が、女性の場合と違う点に関して話し合った。

まず男性の性暴力について、認知度が低いということから派生する問題がある。認知度が低いため、意を決して自らの体験を打ち明けた後、同性愛者と間違われ、合意の上だと思われる傾向がある。カウンセリング治療の目的で話を聞いた医師からさえも理解されないことがある。また、レイプ被害者や同性愛者を、犯罪者とみなす地域や宗教があり、自らの経験を話すことをより一層困難にしている。自らの体験を話さなければ起こった事実は知られることがなく、精神的ケアを受ける機会を得ることもできず、ひとりで苦しむという悪循環が繰り返されている。そして、起こった事実は明らかにならず、支援やケア介入の組織化も進まない。

また、男性が受ける性暴力は、直腸や肛門や膀胱への障害が深刻である。感染症のリスクが高まり、消化器や泌尿器系の後遺症が残り、生涯にわたり精神的トラウマとともに障害を持ち続けることになる。

今回、男性への性暴力が実際に起きているという事実、問題の深刻さと複雑さを学ぶことができた。まず起きていることが事実として明確化されにくいという大きな問題がある。事実を正しく知ることが、まず初めの一步ではないだろうか。そのことが、人間としての尊厳を守るといふという観点において、強く国際社会に訴える手掛かりになるのではないかと考える。

## 長内 夕陽

### 国際基督教大学 国際教養学部 3年

この講義の参加目的として平和構築における問題としてジェンダーがどのような影響を与えているかということ、実際に現地で活動している方々からお聞きすることでした。私は将来平和構築活動に関わる仕事をしたいと考えていますし、そのための有意義な時間を過ごせました。様々な角度からみるアフリカのジェンダー観や紛争の内実を知り、更に興味深く、また自分がこれから何をしたいかということをも改めて考えさせられました。

今回、感銘を受けた点は、この講義のレクチャーをしていただいた認定 NPO 法人日本紛争予防センター (JCCP) が提示した紛争の定義が明確かつ分かりやすかった点です。紛争、暴力、または平和構築という抽象的かつ包括的概念を定義することは極めて難しく、いまださまざまな議論が続いています。JCCP の定義は人によりそり沿いながらも理論的に確立されたものだと思います。私たち一人一人が貢献できることはごく僅かですが、力をそそぐ場所を限定し有効な役割を果たしているように見えました。つまり、目的がはっきりしているため、取り組んだことも結果を残しやすい活動をしているということです。現在まで活動している人々の努力や苦勞なしには成り立たないことだと思います。

新しく得た知識や価値観もあります。まず、用語として”Gender-based Violence (GBV)”というものがありました。アフリカは性暴力や女性の人権侵害の原因は、従来のジェンダ

一観から逸脱であるという解釈を学びました。また、暴力に走ってしまう社会は教育水準が高くないとも学びました。この知識はこれから自分がジェンダーについて学ぼうと重要なものです。また、グループワークを通じて新たな視点も吸収できました。私のグループには看護学部の方や他の大学の生徒の方々がいました。特に性暴力を受けるということを医療の知識と見解をもとに解説していただき、改めてその凄惨さやリスクを実感しました。大学生という身分で、実際に現地に向かう機会はありません。そのため GBV とアフリカの現状をどこか遠くのことであると考えてしまいます。しかしながら、多角的にそのことを捉えることで現実感が出たと同時に身近にも起きうることも気づかされました。この講義を通じてアフリカの現状をグループで話し合いましたが、身近にも同様の出来事が起こりうることも気づきました。これはアフリカの平和構築に取り組むことについて、より地に足がついた議論を展開するよい動機ともなります。

ジェンダー関連の問題は文化、慣習レベルから政治的レベルまで、多岐にわたり存在します。とくにモラルが崩壊した場所で始める平和構築活動ではその問題がより顕著に見えらると思います。今回紹介いただいた JCCP のコミュニティレベルからのアプローチの重要性を学びました。私は、政治学を専攻するにあたり、このような草の根レベルの活動について関心をあまり持ちませんでした。しかしながら、平和構築の軸となるのはこのようなローカルレベルであり、とても重要な役割をはたしているのだと学びました。自分の無知を恥じるともに、これからの政治の役割を再考するよいきっかけとなりました。

今後、私は卒業研究に集中する予定です。今回学んだこととして、平和構築とジェンダーに対する知識は勿論、その問題との関わり方の方向性が見えました。本来、経験からしか学べないような問題を身近に感じる事が出来たことは、大きな財産のように思います。ジェンダーという概念的な問題を変えるためのアプローチの実情を学んだことにより、政治学が果たすべき役割をより立体的に理解し始めるきっかけとなりました。本来の目的を思いがけない方向から達成したように思います。今回、このような機会を与えてくださった方々すべてに感謝申し上げます。

## 五十嵐 由華

### お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1 年

今回、この「平和構築とジェンダー」に参加し、アフリカ諸国における、紛争とそれに伴う多くの問題や課題について知識を深めることができ、とてもよかったと思います。また、大学や学年を超えて、様々な方とグループワークなどを通して交流できたことは、とても刺激になりました。

講義では、アフリカや日本におけるジェンダーの問題や、平和構築の基礎知識を学びました。

まず、日本のジェンダー問題についてです。日本は、男尊女卑の傾向がなかなか抜けない国として、有名です。講義でも示されましたが、とくに、国会の女性議員が少なく、女性の意見が反映されにくい状況があります。ケニアやルワンダは、戦争などの関係もあるとは思いますが、日本より女性議員の数が多くて、驚きました。今の日本社会は、法律上は男女平等です。女性がやろうと思えば、できることもたくさんあると思います。条件は整っていながら、なぜ解決されないのでしょうか。おそらく日本では、男性だけではなく、女性のジェンダー問題への関心も、そんなに高くないからではないかと思います。女性も、女性はこの存在であるべきだ、とか、男性に頼っていたほうが楽だ、とか、そういう考えが心のどこかにあるのではないのでしょうか。もちろん、女性だけが問題だとは思いませんが、決して男性の考えだけの問題ではないと思います。「帰宅して うがい手洗い皿洗い」という川柳が紹介されており、確かに男女の関係は変わってきているなとは思いましたが、逆に、「皿洗いは女がするものだ」という考えを前提として作られたものです。この前提を無くすことが大切だと思います。

次に、アフリカ諸国における紛争下のジェンダー問題と、平和構築についてです。紛争は個人の力や国民の力だけでは、解決することは難しいと思います。なぜなら、紛争は、時に一部の人の利益や権力のためだけになされるうえ、紛争が頻発してしまう国では、国民一人一人に与えられる権利や教育も十分でない可能性が高いからです。だからこそ、アフターケアをし、できる限り再発を防ごうとする平和構築が大切なのだと思いました。平和構築は、紛争下での暴力の予防にもなります。私は、紛争下の暴力というと、性的暴力しか思い浮かばなかったのですが、他にも、身体的暴力、経済的暴力、精神的暴力、社会的暴力があるということを知りました。それらは互いに関係性がある、ある暴力が単独で発生するというよりは、同時多発します。近代の戦争や紛争は、兵士だけではなく市民を殺しますし、物理的だけではなく精神的にもダメージを残します。被害は広範囲に及ぶので、平和構築、つまり再発防止をすることは重要だと思いました。また、なぜ紛争時にレイプ犯罪がたくさん起こってしまうのか、という話が非常に印象に残っています。それが、敵の自尊心を傷つけ、士気を低下させるのだ、と聞いたときには、なんて回りくどいのかと感じました。効果も、あまり想像できませんでした。そのような回りくどい方法でたくさんの人を傷つけ人生を奪うくらいなら、やめてほしいと思いました。ただ、このレイプが紛争下であるコミュニティを崩壊させる、というのはイメージできました。レイプには、偏見が付きまといますから、「村」などの比較的大きなコミュニティを破壊し得ます。また、精神的ダメージも深刻だと想像できるので、それが「家族」という小さなコミュニティをも壊すかもしれません。しかもそれは、紛争下だけではなく、紛争後も続いてしまうのです。紛争が終わっても、崩壊したコミュニティが復活するわけではありませんし、むしろその終戦を機にコミュニティが崩壊してしまったりします。だからこそ、そのような二次的な被害を最小限にするために、アフターケア、平和構築は欠かせないのでしょう。

グループワークでは、物語を読み、それについて考えるというものでした。一つ目は女



の子の被害者の話で、二つ目は男性の被害者の話でした。

話を読み、グループでその経緯を整理し、考察することによって、紛争下で起こっている被害について具体的に考えることができました。特に、二つ目の話は、興味深かったです。男性への被害があるということは知っていましたが、具体的なダメージの原因が想像できませんでした。同性愛とみなされてしまうという偏見や、そのために相談に行きにくいという苦しみは、特に男性特有の被害だと思いました。また、ここで、同性愛とみなされることで起こりうる危険性について話し合ったのですが、グループの法学を専攻していらっしゃる方が法律的危険性について説明してくださり、なるほどと思いました。男性特有の被害としては、身体的な被害もあげられました。私のグループには助産学専攻の方がいらっしゃって、実際にレイプによって起きてしまう身体的被害がどのようなもので、どのくらい治療が大変なのか、教えていただきました。なかなかそのようなお話を聞く機会はないので、良かったと思います。私たちは、レイプなどの暴力の被害者というと女性を思い浮かべがちですが、決してそれだけではなく、男性にも苦しんでいる人がいることを忘れてはならないと思いますし、「男のくせに」などと言って男性を追い詰めることは、男女差別の一つではないかと思います。

国際協力の形態はいろいろあると思いますが、今回の講義とグループワークを通して、

- ① 火種を無くす
- ② 現状を悪化させない
- ③ 再発を防止する

この3つを考えることが必要だと思いました。そして、どれが最も効果的かということと、どれが実行可能なのかということをおまえて、なにか自分たちにもできることがないか考えるべきです。今まで、「国際協力」というと、マクロレベルでの活動のイメージがあったのですが、ミクロレベル、つまり現地の方、個人個人への働きかけが大切なのだと思います。DVDでダンさんを見て、それは特に思いました。国際協力では、全体だけではなくて、個人も大切に、一人一人のケアをすることが必要なのです。その一人一人へのケアが、周りの人々にも良い影響を与え、それが広まっていく。そのような国際協力の形態を、継続するべきだと思いました。

学びの多い半日でした。今回学んだこと、感じたことを、これからの学習に十分に生かしたいと思います。

木村 翠

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科 1年

#### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

まずはじめに、アフリカと日本のことわざを比較しながらジェンダーについて簡単な導

入がありました。驚いたのはアフリカの伝統的ジェンダーも日本と同様に男尊女卑であるということです。男尊女卑のジェンダー観はやはりある程度は世界的に共通しているのだなと思いました。しかし、日本とアフリカ諸国を比較したときに大きく違うのは労働や政治の面での女性参加率です。特に女性国会議員比率では両者には大きな隔たりがあり、この側面が日本のジェンダーギャップ指数のランクの低さに大きく影響を与えています。アフリカではこの女性の政治・経済・社会での活躍を通して伝統的なジェンダー観を変えていこうとしているところは日本も見習うべき部分があるのではないかと思います。

次に、「平和構築とは何か」についての説明とそこからさらに「ジェンダーに基づく暴力」に焦点を当てた講義・グループワークがありました。「平和」とは曖昧な概念であり、人・国・社会によって捉え方が違うというのは本当にその通りであり、この機会に改めて考え直すことができよかったです。JCCPでは平和構築について紛争の予防・管理・解決・予防という4つの面を心がけているということを知って、私はできることなら予防の段階で紛争を未然に防げるのが理想的だと思いました。パーソナリティ心理学概論で、戦争はその後の人格形成に重大な悪影響を及ぼすということを知ったので(PTSDの発症率など)「心のケア」という被害者サポートの重要性も感じました。

また、今回のイベントの中で一番驚いたのは男性も性暴力の被害を受けていたということです。武器としての性暴力が深く知れば知るほどおぞましいものであるということは今回の講義でよくわかりましたが、私自身、性暴力の被害は女性が受けるものだという固定観念がありました。しかし、資料にあったような男性の性暴力被害は想像するのも辛いくらい恐ろしいものでした。さらに悪いことにはその男性達がおかれた境遇は宗教的問題や社会のシステムからもはじかれやすくなってしまっているのです。「ジェンダー」についてなるべく平等に考えようとしてもこのように固定観念によって気づかれない苦しみもあることに気づくことができよかったです。様々な側面から物事を眺めるにはやはり、こういった事例をたくさん知っておくことが大切だなと感じました。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は今回初めてグループワークを体験しました。初対面の人たちとうまくコミュニケーションをとれるのだろうかと不安でしたが、実際に行ってみるとうまく役割分担できたり、アドバイスをもらいながら進めることができました。今回のグループワークで強く思ったことは様々なバックグラウンドを持った人たちと話し合うのは面白いということです。私のグループには元助産師の方、国際法を学んでいる方、法律一般について学んでいる方、国際協力について学んでいる方など、実に多様な専攻の方がいらっしゃいました。男性の性暴力について話し合ったときに、元助産師の方が医学的な人体構造の側面からこの問題についての意見をおっしゃってくださり、多くの専門家と意見を交わしていくことは新たな発見があって楽しいものなのだと思います。将来働く時にも、このような協力は多くの場面であるだろうし、今回グループワークの楽しさを少し知ることができて良かったです。

す。ただ、今回のグループワークでは問題点についてまでしか話し合うことができず、その先にどのような解決法が考えられるか、というところまで話を深めることができなかつたのが心残りでした。しかし、たくさんの発見があった良い時間でした。

## その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

### 【平和構築】

現代では世界大戦のような大きな戦争は起きていません。しかし、紛争と呼ばれる小さい規模の争いは多発しています。世界から見れば小規模かもしれませんが、そこに生きる人々が受けるダメージは計り知れないほど大きいでしょう。現在の紛争の要因は、領土問題、宗教対立、民族問題、貧富の格差、資源獲得競争等、多岐にわたり原因一つにとっても考えていかねばならない側面が多いことが分かります。また、紛争の長期化は社会に様々な深刻なダメージを与えてしまいます。そのため、最善の策はやはり紛争を未然に防ぐことだと思います。エルサルバドルの内戦で敵同士が武器を捨てて話し合いで解決した例もあるように、武力に訴えないで争いを解決することはできると思います。しかし、それがうまく行かないことが多いのがやはり現状なので、JCCPが行っているような現地の人々や複数の機関と協力していく有機的な体制はとても重要だと思いました。

### 【ジェンダー】

今回のイベントで知った男性への性暴力のように、私自身も実はジェンダーバイアスの視点で物事を捉えているのだと気づかされました。そのため、もっと多くのジェンダーについても見方を知って、ジェンダーについて広い視野で見ることができるようになりたいと思いました。また、ジェンダーによって搾取されたり、より大きな被害を受けるということは、本当になくしていかなければならないと強く思いました。

### 【国際協力】

JCCPの取り組みやNGO、国際機関の活動を見ても感じるようなのですが、最近のこれらの団体の活動は現地に寄り添ったもの、持続可能なものであるという特徴があります。多くの団体との複合的な協力があつてこそ国際協力は成り立つのだなと思います。また、このような機関ではなくても、身近なところから取り組める支援も存在しているので、私はそのようなところからも「協力」に関わっていこうと思いました。

## 今後の学習や研究に向けた抱負

紛争の問題、ジェンダーの問題、どれも深刻であり、人が安心して生きていくためには克服していかなければならない問題です。自分自身今後この分野を深めていくかはまだ未定ですが、考え、学んでいきたいと思っています。

佐藤 幸恵

創価大学 文学部人間学科 2年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

紛争下において性暴力が武器として用いられるという事実が、非常な衝撃であった。紛争のない国で起こる性犯罪とは全く異なる性質を持つのだと分かり、その被害を防ぐためには、より、紛争における対立関係やその情勢を理解した上での行動が求められるのだと感じた。

また、これまで、紛争下で弱い女性がひどい被害を受ける側となってしまう、という認識があったが、男性にも性暴力の被害者が存在し、女性とは違った男性被害者特有の問題や被害があるということを知り、紛争下の性暴力に関して理解がより深まったと感じている。これから、紛争後の平和構築を考える際に、男性被害者の問題は決して無視してはいけないものだと感じた。今回のイベントを通じて男性被害者の現状を知ることができ、良かったと感じている。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

他大学、他学部の学生と交流する機会を持つことができ、また、グループワークの中で自身の知らない分野に関する知識などを多く得ることができ、非常に良かった。

グループワークの内容に関しては、紛争の現状や被害、影響について、複数でじっくりと分析して考えるという、普段あまりすることのない活動を行うことができ、新たな発見が多かった。また、実際の事例を用いることで、実際の紛争被害の現状をより理解することができたと思う。

### その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

性暴力が被害者に与える影響の大きさを、改めて感じた。被害を受けた人は、心身ともに大きな傷を受け、さらに自身の住む地域において、ずっと社会的な軽蔑を受け続けなければならない。相手の一生に影響を与え続ける性暴力が、紛争下で武器として頻繁に用いられ、多くの女性が被害に遭い続けているという事実を、決して他人事に感じてはいけないと思った。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

紛争後の地域における平和構築において、教育がどのような役割を、どの程度果たしていくことができるのかに非常に興味があり、大学でも教育分野に関する学習を進めている。したがって今回のイベントも、性暴力の被害者をはじめとする、紛争の被害者の心を癒し、回復へと導いていく段階で、教育がどのように役割を果たしていけるのか、という点について考えたいと思っていたのだが、正直、イベントを通して感じたことは、現状、紛争地

域においては、教育環境を整える以前に、必要とされるものがいくらでもあるのだということであった。教育は、平和構築において非常に大きな役割を担うという考えは変わっていないが、他の様々な援助の中で、教育がどのように進められていくべきなのか、具体的にどのような役割を担うのかを、より広い視点で考えていく必要があると感じた。これから、より多くのことを学び、考えを深めていきたい。

富永 理沙

上智大学 法学部法律学科 4年

### 講義を通じて感じたこと・印象に残ったこと

講義全体を通して、まずこのワークショップのタイトルにもなっている「平和構築」や「ジェンダー」、「ジェンダーに基づく暴力」などの言葉が、何を意味するのか、意味しうのかを確認できたと思います。このようなワークショップや講義、関連の文献などではよく目にする言葉がそもそも、様々な文化や社会的背景からくる視点や範囲の設定の仕方によって、少しずつ違うことがありうるということがわかり、またどのような類型があるのか等の面でも理解を深めることができました。

特に興味深かった内容は、紛争がどのように人々のジェンダー観や社会全体の雰囲気に影響を与えていくのかという点と、ソマリアでのプロジェクトの実例です。紛争が社会に好影響を与えないことは明らかですが、紛争が「男性が女性を守る」という伝統的ジェンダー観の発生と密接に関わっているという説明をきいて驚いたと同時に納得しました。名誉犯罪や酸攻撃の動機でも、女性を「男性の強さ、男らしさ」のシンボルとする考え方が見られるようですが、そのようなジェンダー観が、紛争下での軍事力増強や「強制」という傾向の中でさらに強まり、女性が特に心身ともにその影響を受けることがわかりました。また、ソマリアの話を通じては、紛争解決や平和構築といった言葉だけでは理解しにくい点、つまり一体どのような手段で実際に紛争を解決したり平和を構築したりしているのかということが、少し具体的にイメージすることができるようになりました。JCCPが直接職員を派遣して医療サービスのように処置を施すという方法ではなく、JCCPが去ったあとにも現地の人々が自立的に平和構築を行っていけるようにするということを目的に活動していることがわかり、慈善事業や直接支援ではない、人々が自分たちの手で自分達の共同体に平和を構築していくスタート地点を作ることが海外からの支援として望ましい形なのかなど感じました。

### グループワークを通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、様々なバックグラウンドや背景を持った同じグループの人達と共に考え、意見を出し合えて良かったです。特に、看護や助産といった保健の分野からの専

門的意見が出たりして、自分自身だけでは得られないような考えが共有できた点がためになりました。

特に印象に残ったことは、扱った 2 つの事例です。ジェシカの方は、紛争によって男性より大きく変わってしまう女性の人生に心が痛みました。レイプされ両親を殺されただけでなく、教育も受けられず、男性に恐怖感を抱くようになり、地域からも白い目で見られるようになるというように、紛争中での暴力だけでなく、人生に渡って続く精神的苦痛があることが改めてわかりました。しかし、男性への恐怖のようなトラウマがあるかもしれないのに、生きていくために売春せざるを得なくなったりするのかな、と想像して究極の選択をせまられている女性について考えました。しかしそれにも増して衝撃的だったのは 2 つめの男性の性的暴力被害者の方のお話です。男性も性暴力の被害者になると聞いたことはあったものの、その数が 1000 人に上るというのは想像以上に多くて驚きました。同性愛が犯罪ではない日本のような国においてできえ、被害者の男性自身が男性としての自尊心から被害を訴え出にくいことは理解に難しくなく、だからこそ認知度も低く救済や社会的サービスも受けられず隠れたまま苦しむことになってしまうと思います。そこに同性愛への強い偏見や罰則があれば、レッテルや罰則を恐れて声を上げられないと思います。また、身体的損傷・後遺症の面でも損害がかなり深刻になってしまうことを知り衝撃でした。男性被害者は、女性と同様に性暴力による傷をうけただけでなく、男性特有の困難を抱えている状況があるとわかりました。

### その他平和構築、ジェンダー、国際協力等について考えたこと

平和構築は、はじめどのようなものかあまり理解できていませんでしたが、紛争のあとに回復と再発防止のために平和のシステムを作ることなのだと思います。そして都議会でセクハラ野次があったり、大阪で任期中に出産した女性議員へ別の議員から非難があったり、家庭内・企業内といった場だけでなく、いち早くジェンダーの平等を急ぐべき場で、日本が遅れをとっていることが最近取り上げられていることもあり、ワークショップの内容と関連して考えさせられました。ジェンダーに基づく暴力、特に性暴力が、相手の尊厳を傷つけるのに有効で、紛争時だけでなく将来に渡って敵集団にダメージを与えることが深刻な問題であると思いました。そのように長期にわたるダメージを個人・集団に与えたり、女性の立ち位置を下げてしまう紛争が 2 度と起こらないようにするためにも、平和構築の役割は大きく、そのときに行う啓発活動が大切になってくるのかなと考えました。紛争被害者がストレスから別の紛争加害者になってしまうというビデオのとき、カウンセリングや危害を加えてしまった相手との話し合いというに、当事者どうしが向き合うことによって関係を修復していくような側面も心に残りました。国際協力に関して、2 でも書いたように、紛争のない国の人が、紛争のあった地域の人に何かしてあげるという形ではなく、紛争のあった地域の人々が自立的にコミュニティを再生させ、紛争再発を防止していく仕組みづくりをすることが、紛争解決についての国際協力の在り方なのだなと思いました。

### 今後の学習や研究に向けた抱負

名誉犯罪に興味をもち、ジェンダーについて考えることが多くなったのですが、法律で女性への暴力を禁止したり、レイプを厳罰化したりするだけでは、人々のジェンダー観をがらりと変えることはあまり出来ないのだなと感じていました。しかし、平和構築のように、仕組みを作っていくという広い枠組みでとらえれば、必ずしもそのようなことはないと思いました。今まで、人権の観点から、どうすれば女性や同性愛者への差別がなくなるか考えていましたが、平和構築のような方法もあることがわかったので、より幅広い視点から学習していけるとと思います。

### 3. 講師報告書





1. 研修対象：お茶の水女子大学 グローバル協力センター 大学間連携イベント
2. 研修科目：平和構築とジェンダー
3. 研修期間：2014年6月28日（土）13:00～17:00
4. 研修講師：石井 由希子、笹生 雪
5. 研修開催場所：お茶の水女子大学

---

### 研修概要（実施方法等）

本研修は、お茶の水女子大学 グローバル協力センター 大学間連携イベントの一環として実施された。お茶の水女子大学、奈良女子大学、宮城学院女子大学、津田塾大学、ICU、上智大学、聖路加国際大学、創価大学の、8大学から合計27名が参加した。

他大学の学生との交流を自然に図れるよう、あらかじめ全員を5グループに分けておいた。当日はまず最初に各グループ内で他己紹介を行わせ、各参加者の経歴や関心の所在を知ってもらうよう促した。ここでかなり打ち解けることができたため、その後のグループワークが比較的スムーズに進行した。

講義ではまず、主にアフリカの諺を取り上げながら、文化や時代によってうつろうジェンダーの基本概念をおさえた。続いて、平和構築についての理論的枠組を説明し、実際にケニアのコミュニティで行われている平和構築の取り組み（紛争被害者への心のケア）を動画で学んでもらった。動画では現地関係者の証言を交えながら現場の実態が紹介され、ふだん遠い国の出来事と思われがちなアフリカの平和構築を、少し身近に感じられたようだった。

その後のグループワークでは、ウガンダの少女の体験談をもとに、まず紛争の前・中・後における男女の経験の相違を比較分析させた。続いて、紛争下のジェンダーに基づく暴力の定義や武器としての性暴力について説明し、コンゴ民主共和国の男性被害者の事例を取り上げた。ここでは被害者が必ずしも女性だけではない事実を認識してもらい、男性被害者に特有の困難についてグループ毎に考えてもらった。多くの参加者にとっては衝撃的な内容だったようだが、ジェンダーに基づく暴力の深刻さや複雑さに気付いてもらうきっかけとなった。

次に、ソマリアにおけるジェンダーに基づく暴力被害者への支援事例を紹介して、さまざまな専門性を持つ人々の協力が必要であることや予防のための取り組みも重要であることを確認してもらった。質疑応答では、識字率の低いソマリアで好評だったラジオトークシ

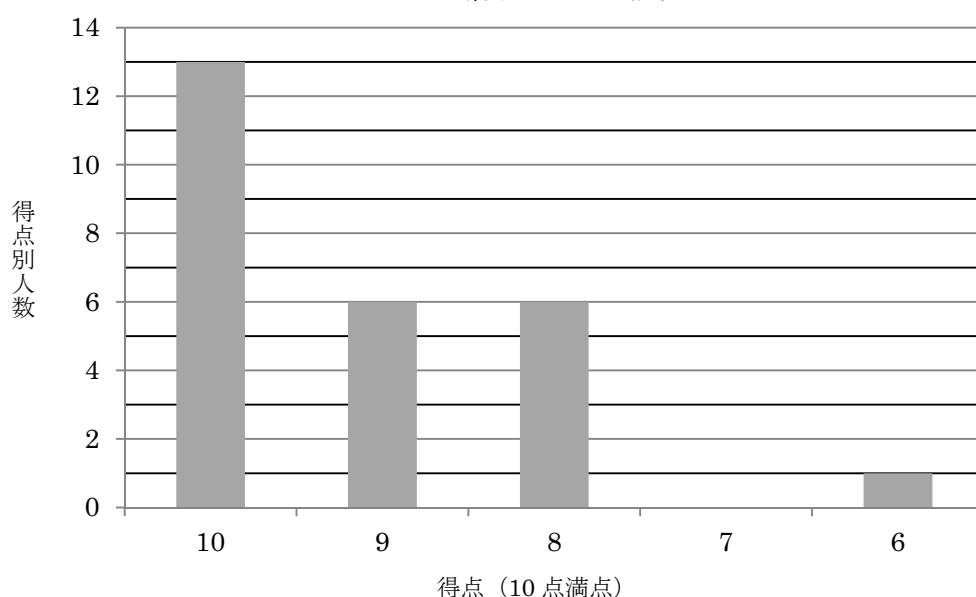
ョーがとりあげた司法へのアクセスの問題や、現地政府との連携のあり方、現地の宗教や文化風俗への配慮の重要性にまで話題が広がり、参加者の支援活動への関心の高さがうかがえた。

評価セッションでは、「頭で考えたこと」「心で感じたこと」「行動したいこと」の3つに分けて、参加者にワークショップ全体のフィードバックをしてもらった。

- 「頭で考えたこと」としては、紛争下で男性への性暴力が起きていることや男性被害者に特有の困難について学んだことで、ジェンダーに基づく暴力の複雑さに気づき、被害者への多角的かつ戦略的な支援が必要であると考えた者が多かった。
- 「心で感じたこと」としては、ジェンダーに基づく暴力の深刻さや、被害者の精神的な苦痛に共感を寄せる者が多くみられた。一方で、男性と話し合って協力していく必要性を感じたり、実際の支援の難しさに悩みながらも何かをしたいと強く動機づけられたりした者も複数いた。
- 「行動したいこと」としては、SNS（Facebook、Twitter、ブログ等）や対話を通じて友人や知人に伝えたいという声が圧倒的多数を占めた。あわせて紛争解決やジェンダーに基づく暴力についてもっと知識を深めたい、という意見も多く見られた。また、現地訪問、ボランティアとしての貢献、キャンペーン等への協力を挙げる者もいた。

最後に理解度アンケートを26名に対して実施したところ、平均点は9.15点（10点満点）となった。回答者のうち半数の13名は全問正解しており、正答率が低かった者は主に途中からの参加者であった。総じて今回のワークショップの内容は十分に理解されたと言える。

理解度アンケート結果



## 所感

### 【石井】

参加者はいずれも真摯に課題に取り組み、グループ内で議論を活発に戦わせ、こまめにメモを取るなど知識の吸収に食欲であった。専攻分野の違う学生らと話し合うことで、いろいろな方向から知的な刺激をうけた様子も見て取れた。問題意識の高い学生が参加していたことは、今回のワークショップの講師陣にとっては幸運であった。内容をやや詰め込みすぎた感はあるものの、スケジュール通りに4時間におさめることができたのは、ひとえにお茶の水女子大学の関係者の入念な準備ときめこまやかな支援のおかげである。この場を借りて感謝したい。

### 【笹生】

参加者は、講義中には講師の質問に反応良く答え、グループワークに真剣に取り組むと共に、講義の合間や講義が終わった後には積極的に質問をしに来てくれた。質問は講義の内容についてだけでなく、将来国際協力の現場で働くことを志す学生からのキャリアに関する質問にも及び、参加者の意識が高いことが伺えた。講義内容に関して鋭い質問をされ、自身も一層勉強をする必要があることを実感した。

参加者のまとまりが良かったのは、全員女子学生であり、女子大学から来た学生が多かったことも関係しているであろう。ワークショップ終了後には、連絡先を交換し合う学生も多く見られた。そうした繋がりを生かし、今後もジェンダーと平和構築というテーマについて勉強したり、行動を起こしてもらうきっかけとなったりしたら良いと考える。

グローバル協力センターの職員とは、事前に対面やメールで密な連絡を取らせて頂き、大変お世話になった。数点の資料の送付が開催日直前となってしまったことは反省点であり、深くお詫び申し上げたい。当日使用する資料の内容確認以外にも、会場準備や文房具の準備を滞りなくして頂き、感謝申し上げます。

以上



## 4. 資料





センター長挨拶



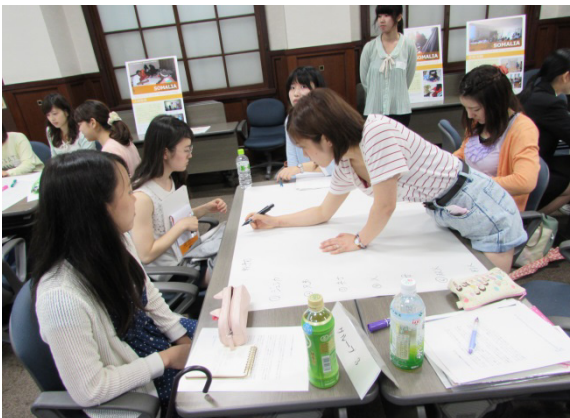
参加者自己紹介



講義Ⅰ「アフリカの諺からみえてくるジェンダー」



講義Ⅱ「平和構築とは何か？」



グループワークⅠ



グループワークⅡ





講評



講義Ⅲ「紛争化のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援：ソマリアの事例」



司会挨拶

お茶の水女子大学グローバル協力センター  
大学間連携イベント

# 「平和構築とジェンダー」



6/28

(土)

13:00~17:00

お茶の水女子大学

大学本館 103 室

## 【趣旨】

ケニア、スーダン、ソマリア等アフリカ諸国において紛争予防と平和構築の国際協力を実施する認定 NPO 法人日本紛争予防センター (JCCP) から現場の事業経験を有する講師を招き、講義やグループワークを実施し、ジェンダーの基本概念を正確に理解するとともに、アフリカの事例紹介を通じて紛争下におけるジェンダーに基づく暴力の実態について知識を深める機会とする。

## 【プログラム】

- 13:00~ 開会
- 13:20~ 講義Ⅰ「アフリカの諺からみえてくるジェンダー」  
講義Ⅱ「平和構築とは何か？」
- 14:20~ ( 休 憩 )
- 14:35~ グループワークⅠ「紛争とジェンダー」  
グループワークⅡ「紛争下のジェンダーに基づく暴力」
- 15:50~ 講義Ⅲ「紛争下のジェンダーに基づく暴力の被害者への支援：ソマリアの事例」  
閉会

対象：国際協力に関心を持つ本学学生（学部、大学院、研究生）、ならびに他の女子大学生（学部、大学院） 約 30 名程度

申込方法：お茶の水女子大学 グローバル協力センターホームページより申込用紙をダウンロードのうえ、[info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp) までメールすること。

申込締切： 2014 年 6 月 13 日(金)

センターURL：<http://www-w.ao.ocha.ac.jp/intl/cwed/>

お問合せ：Tel：03-5978-5546 E-mail：[info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)



---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「平和構築とジェンダー」  
実施報告書

2014年11月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)